

# HUMAN RIGHTS

令和4年度

第41回 全国中学生  
人権作文コンテスト

## 横浜市大会 作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

# 第41回

全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

# はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が人権問題についての作文を書くことを通じて人権尊重の重要性や必要性についての理解を深め、豊かな人権感覚を身につけることを目的としています。

本年度は、一三一校、五三、四三四編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権問題について自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものが

あります。

この作文集は、校内審査を経た六二〇編から、一次審査で五六編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二五編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和四年（二〇二二年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・  
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）

横浜市教育委員会

## 【審査講評】

第四十一回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一三二校から五三、四三四編の作品を御応募いただき、ありがとうございます。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日頃の自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、いじめなど子どもに関するもののほか、高齢者や障害者、外国人など幅広い分野から寄せられました。また、今回は、昨今の社会情勢を踏まえて、戦争や平和に関することや、性的指向・性自認に関することを取り上げた作品も数多くありました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じての、ふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださ

ることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校国語研究会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「ぼくはスカートを履いている」「悲しい歴史を終わらせる」「気づきたい『笑顔』」「ありのままの自分を認める」「認知症は恥ずかしくなかない」「障がいにも個性」「互いの違いを理解して」「支え合い」を神奈川県大会の優秀賞として推薦しましたことを御報告いたします。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査員長 小林 千恵子

(横浜人権擁護委員協議会長)

# 目次

はしがき

審査講評

入選者紹介

## 最優秀賞

### ●横浜市長賞

ぼくはスカートを履いている

横浜市立新羽中学校

二年

増田春之介

7

### ●横浜市教育長賞

悲しい歴史を終わらせる

横浜市立新羽中学校

三年

菅野夏帆

10

気づきたい「笑顔」

横浜市立旭北中学校

三年

匿名

13

### ●横浜人権擁護委員協議会長賞

ありのままの自分を認める

横浜市立西金沢義務教育学校

八年

佐瀬友田

16

認知症は恥ずかしくなんかない

横浜市立瀬谷中学校

三年

未来

19

●横浜市人権擁護委員会会長賞

「障がいにも個性」

互いの違いを理解して

横浜市立末吉中学校……………

三年

横浜市立あかね台中学校……………

一年

宇田 しょうご  
金子 かねこ  
章悟 しょうご  
彩奈 あやな

…  
…  
…  
…

…  
…  
…  
…

●横浜DeNAベイスターズ賞

支え合い

横浜市立もえぎ野中学校……………

三年

塩田 しおだ  
千陽 ちほる

…  
…

●横浜F・マリノス賞

社会の一員

横浜市立川和中学校……………

三年

安岡 やすおか  
優愛 ゆあ

…  
…

●横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ賞

一人の勇気で

横浜市立あざみ野中学校……………

三年

齊藤 さいしろう  
輝恵 きえ

…  
…

●横浜ビー・コルセアーズ賞

ジェンダー『平等』より『レス』へ

横浜市立六浦中学校……………

三年

屋比久 やはひく  
由梨香 ゆりか

…  
…

●横浜キヤノンイーグルス賞

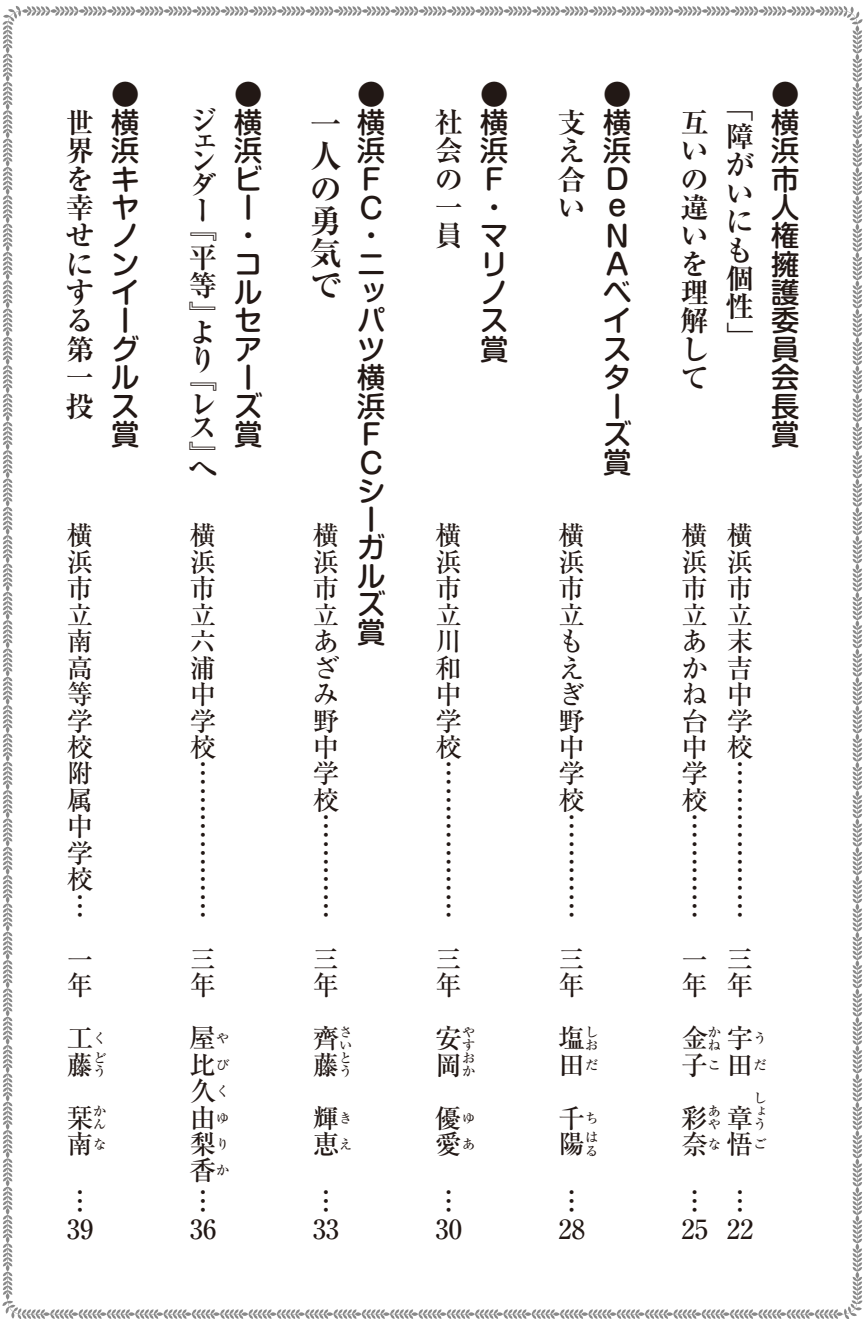
世界を幸せにする第一投

横浜市立南高等学校附属中学校……………

一年

工藤 くしろう  
栞南 かしな

…  
…





# 優秀賞

<p>名前は宝物          本当の「親切」を目指して          誰一人取り残されない未来へ          記憶に生きる存在          差別や偏見          自分らしく生きること          命の理由          私の母は障がい者          理解するということ          私は私らしく          「体験」と「記憶」、つなぐのは私たち          「温かい数分間」          暗闇に潜む心の声を</p>	<p>横浜市立市場中学校……………三年          横浜市立新井中学校……………三年          横浜市立六ツ川中学校……………三年          横浜市立万騎が原中学校……………一年          横浜市立東永谷中学校……………三年          横浜市立名瀬中学校……………三年          横浜市立中和田中学校……………三年          横浜市立老松中学校……………二年          横浜市立日吉台中学校……………二年          横浜市立緑園義務教育学校……………九年          横浜市立青葉台中学校……………一年          横浜市立共進中学校……………三年          横浜市立南高等学校附属中学校……………一年</p> <p>安藤りあ          うえむら          村上彩乃          梅津渓人          大川康太          おおつか          おおつか          大塚風花          かとう          加藤さくら          かむら          河村埜愛          岸き珠          くりや          栗屋珠来          近藤薫          こんどう          近藤菜月          佐々木倫子          ささき          佐々木倫子          澤井優希          さわい          澤井優希          関美月</p>
--	---

<p>参加校紹介……………</p> <p>応募状況……………</p>	<p>……………</p> <p>……………</p>
------------------------------------	---------------------------



入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

増田春之介

ぼくはスカートを履いている……………

横浜市立新羽中学校 二年

最優秀賞（横浜市教育長賞）（氏名五十音順）

菅野夏帆

悲しい歴史を終わらせる……………

横浜市立新羽中学校 三年

匿名

気づきたい「笑顔」……………

横浜市立旭北中学校 三年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）（氏名五十音順）

佐瀬凜

ありのままの自分を認める……………

横浜市立西金沢義務教育学校 八年

友田未来

認知症は恥ずかしくなんかない……………

横浜市立瀬谷中学校 三年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会会長賞）（氏名五十音順）

宇田 章悟 「障がいにも個性」……………横浜市立末吉中学校 三年

金子 彩奈 互いの違いを理解して……………横浜市立あかね台中学校 一年

最優秀賞（横浜DeNAベ이스タース賞）

塩田 千陽 支え合い……………横浜市立もえぎ野中学校 三年

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

安岡 優愛 社会の一員……………横浜市立川和中学校 三年

最優秀賞（横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ賞）

齊藤 輝恵 一人の勇気で……………横浜市立あざみ野中学校 三年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

屋比久由梨香

ジェンダー『平等』より『レス』へ

横浜市立六浦中学校 三年

最優秀賞（横浜キヤノンイーグルス賞）

工藤 栞南

世界を幸せにする第一投

横浜市立南高等学校附属中学校 一年

優秀賞（氏名五十音順）

安藤リアナ

名前は宝物

横浜市立市場中学校 三年

上村 彩乃

本当の「親切」を目指して

横浜市立新井中学校 三年

梅津 溪人

誰一人取り残されない未来へ

横浜市立六ツ川中学校 三年

大川 康太

記憶に生きる存在

横浜市立万騎が原中学校 一年

大塚 風花

差別や偏見

横浜市立東永谷中学校 三年

加藤 さくら

自分らしく生きること……………横浜市立名瀬中学校 三年

河村 楚愛

命の理由……………横浜市立中和田中学校 三年

岸 珠来

私の母は障がい者……………横浜市立老松中学校 二年

栗屋 薫

理解するということ……………横浜市立日吉台中学校 二年

近藤 菜月

私は私らしく……………横浜市立緑園義務教育学校 九年

佐々木 倫子

「体験」と「記憶」、つなぐのは私たち……………横浜市立青葉台中学校 一年

澤井 優希

「温かい数分間」……………横浜市立共進中学校 三年

関 美月

暗闇に潜む心の声を……………横浜市立南高等学校附属中学校 一年

入賞（氏名五十音順）

石川 野々香

壁を乗り越える君の隣に……………横浜市立森中学校 三年

岩間 歩友夢

誰もが幸せを感じることでできる世界に……………横浜市立六ツ川中学校 一年

内田野々花

桃から学んだ2つの力

横浜市立永田中学校 三年

榮島四郎

きょうだい児の人権について

横浜市立岡野中学校 三年

小野優衣

私が誰かを助けるために

横浜市立茅ヶ崎中学校 二年

影山さくら

三年後

横浜市立西柴中学校 三年

桑原優空

「伝える」

横浜市立川和中学校 三年

佐久間凜

知らない

横浜市立大綱中学校 二年

佐々木栞夏

自分らしい選択を

横浜市立旭中学校 三年

佐藤葉南

安全に笑顔で暮らすために

横浜市立美しが丘中学校 三年

嶋村紗英

「いじめをなくすために」

横浜市立藤の木中学校 一年

菅原聡子ルイーズ 名前は永遠の宝物

横浜市立鴨居中学校 三年

高城凜

十人十色

横浜市立南瀬谷中学校 三年

高間瑠璃

質問があります

横浜市立中山中学校 三年

爲頼 ためより  
咲菜 さくな

「いつもありがとう。」……………横浜市立領家中学校 二年

新倉 にいくら  
大翔 ひろと

特別扱い ……………横浜市立南瀬谷中学校 三年

貫井 ぬくい  
音 おと

「想像力で当たり前を変える」……………横浜市立篠原中学校 三年

野里 のざと  
弥央 みお

「幸せへの第一歩」……………横浜市立中川西中学校 二年

松田 まつだ  
紗帆 さほ

笑顔を繋ぐために ……………横浜市立鴨居中学校 二年

南條 なんじょう  
絢萌 あやめ

女の子らしく?いいえ、自分らしく……………横浜市立鶴ヶ峯中学校 一年

向田 むこうだ  
香耶 かや

私が選ぶ言葉……………横浜市立新田中学校 三年

山田 やまだ  
駿 しゅん

人が人を知るために……………横浜市立岡津中学校 一年

吉川 よしかわ  
すず

本当に当然なのか……………横浜市立田奈中学校 二年

吉田 よしだ  
光希 みつき

勝手に人を決めつけていいのか……………横浜市立六角橋中学校 一年



最優秀賞（横浜市長賞）

## ぼくはスカートを履いている

横浜市立新羽中学校 二年

増ます田だ春之介はるのすけ

ぼくは制服のスカートを履いている。テストの時、合唱祭、高校見学でも。『ぼく』という一人称もしくくりこないで、早速だが『私』にする。

なぜスカートなのかというと、涼しいし、かわいいからだ。ズボンは悪くないが、あつい。涼しくてかわいいのならば履く。いつからスカートを履くようになったかというと、小学五年生の時だ。英語教室の発表会で女の子役をやった。性別の問題に訴える目的もあった。英語の先生は母だ。本番後に隣のコンビニにスカートで行ってみたいと思ひ、母に聞いてみたらすんなり「いいよ。」といわれた。実はやめなさいと言われると思っていたからビックリした。それからは安心して履きたいと言えるようになった。

私は、見た目は『格好いい』より『かわいい』と言われたい。これまでジャージが楽だと思っていた。ある日母が女の子用のお店に連れて行ってくれてから洋服を着るのが楽しくなった。姉もいつも「かわいい」とほめてくれる。昔から髪も伸ばしたかった。今は肩まであり、美容院では、女の子カットしてもらっている。美容師さんはすんなりうけいれてくれる。普段からオシャレに関わる日常を過ごしているからかなと思う。

私には女の子のお友達も多い。男子からは変な意味にとられたこともあったけど、べつに気にしない。発達



障害もあってオープンにしているし、昔からいろんな反応を受けてきた。いちいち気にしていたら生きていけない。ここまで読んでいただき、学校の校則はどうなってるのと思う人もいるだろう。私が入学する前、姉の友人が生徒会で、制服を変えたいという要望をしていた。その時女子がズボン履いてもよくなった。先生がたが私のスカート履きたいという要望をさらに話合ってください、ついに校則が変わった。『女子』『男子』の文字が削除。家族で感動した。母は泣いていた。携わってくれた先生は「いつか取り組まなければいけない問題なので、向き合わなければ。」と言ってくれた。また、そういう環境があたりまえだと思ってくれている先生もいる。そうだし、本当によかったと思う。みなさんにつたえたいのは、まわりの人という大切さだ。

私が、みんなにスカートや障害のことをいってよかったと思うのは、理解してくれている人がいることだ。しかも結構な人数。最近はSDGsもあって、関わりを持つとうとしている人も多くなり、言いやすくなっている。正直SDGsの中で障害をあつかうことは「遅くない？」と思ったが、障害というものを知らない人も多かった。みなで考えることができるのでよいきかいだ。小学校低学年の時は、私も友達なんていらなかった。思っていたが、今はたくさんの大切な友達、味方がいる。みんなには、本当の自分のことをいっていいと思っしてほしいし、いわないのは嘘をついて生きていくことになる。保護者や先生にも、私たちが言ってもいい人だと安心できる環境をつくってほしい。子どもに嘘をつかせないほしい。その子自身は、言おうとしている。子どもでもヘルプの気持ちがある。ヘルプをオープンに。それをダメと言うことは、その子をいじめている。存在を否定している。あるデイズニー映画で「かくせ、感じるな、みんなに知らせるな。」と言う父親から娘にいいきかせるシーンがあるがおかしい。誰が見ても、おかしいと思えるように書かれている。それと同じこととはしないように、というメッセージだ。映画にこだわらずにただでなく、この世界にもむきあって私たち

を守ってほしい。母曰く「ハルはハル、障害を持っていることを隠したら、自分は隠すような恥ずかしい人間なんだと思ってしまう。他人に対して、誰一人そんなことはしてはいけない。」今ではこれが私の考えにもなっている。

私は障害を持つ身としてみんなと同じように接してほしい、特別扱いされたくない。スカートも特別ではない目で見てほしい。私と同じ思いをして、勇気をだして自分のことを話した人のことをたくさんの人に理解してほしい。私が障害を持っていないければずっと障害を知らなかったかもしれない。ほかのことも知らなかったかもしれない。同じ思いをしている人の役に立ちたいと思えるようになった。私の人生全ては、神様がくれたプレゼントだと思う。



最優秀賞（横浜市教育長賞）

## 悲しい歴史を終わらせる

横浜市立新羽中学校 三年

菅野夏帆

私は、最初この人権作文を「はやく書き終わらせたい」と思っていた。私は、何不自由なく幸せに生きてきたので人権問題について深く考えることが今までなかった。しかし、祖母からある病の人権問題について話を聞き、悲しい歴史と現状があることを知って、この人権問題を他人事で終わらせてはいけない、という事を身に染みて感じる事となった。

その病の名は「ハンセン病」。ハンセン病とは、らい菌という細菌に感染して起こる病気で、かかると手足などの神経が麻痺し、汗が出なくなる・痛い、熱い、冷たいといった感覚がなくなる・失明・体の一部が変形してしまうなどの症状が現れる。また治療法がない時代は障害などの後遺症が残ることもあった。しかし、らい菌は感染力が弱く、感染したとしても発病する力もとても弱い細菌であるため、感染率・発病率はとても低い。さらに、現在は治療法も確立していて、治療薬もある為、もし感染して発病したとしても、適切に治療すれば後遺症もなく治すことができる。今、この作文を読んでいるあなたは「ハンセン病」にどんな印象を持つのだろうか。持った印象は、人それぞれ違って当然だと思うがこの文の説明からだ。「ハンセン病」は、感染力が強く恐しい病気」という印象を持った人はいないと思う。しかし、かつて国の誤った政策により、人々はハ

ンセン病に誤った印象を強く持ち、「ハンセン病は、感染力が強く恐い病気」と誤解されてきた。その誤解によってハンセン病患者・元患者とその家族の方々は、酷い差別と偏見に苦しめられてきた。ハンセン病にはそんな悲しい歴史がある。しかし、この悲しい歴史はまだ終わっていない。今でもまだ、ハンセン病患者・元患者とその家族の方々に対する差別と偏見が根深く続いているという悲しい現状がある。

しかし、なぜ今でも根深く差別と偏見が続いてしまっているのだろうか。その原因には、当時から変わらぬ私たち人間の考え方が関係しているのではないかと考えた。誰もが一度は体験したことがあると思う。それは、人から聞いた事を鵜呑みにし、事実か分からない事を真実を知ろうとせず人に伝えてしまう事。また、自分が人に何かを伝える時に元の事柄に手を加えたり、誇張をしてみましたりする事。そして、最初についた印象は中々変える事が出来ず、その印象が全てだと誤解し、その誤解はやがて常識化されてしまう事。もちろん、そうでない人もいると思う。しかし、このような人は決して少ないとはいえない。私もこのような体験を何度もしたことがある。例えば、「あの子って、こんな悪い子なんだよ!」と聞いて、話しを聞いたただけなのに勝手に「悪い子」と誤解をし嫌な印象を持ってしまったり、友達と一緒に噂話をしてしまったり、見たものを一瞬で判断し印象づけてしまう事もあった。しかし、一歩間違えるとハンセン病人権問題のように差別と偏見に苦しむ人が出てしまう事になる。

私には、幼稚園の頃から仲の良い大事な友達がいた。その子は、生まれつきアトピーがあった。また、アレルギーがとても多く体も弱かった。その為、休む日が多く、学校でも私以外とはあまり交流がなかった。その子が体調不良で一週間程休んで久し振りに学校に来てくれた日の事だった。ある一人の男の子が「あいつの体なんか赤いポツポツやばくね」と言い出した。その日は、冬だった為乾燥でアトピーが悪化している時だっ

た。すると、周りの子たちまでどんどん言いたい事を言い出した。「なんかの病気なんじゃない？」という一人の女の子の言葉によってさらに事態は、悪化した。みんなの認識が「病気」となってしまったのだ。「うつるから逃げる！」とみんなが言っていた。その時に私は、その子のそばにいて何も出来なかつた事を今でもとても悔やんでいる。その子の心に負つた傷は計り知れない。私は、誤解を解く為、担任の先生に相談をし、クラスのみんなに説明をしてもらつた。説明をしてもらつても、すぐに誤解は解けなかつた。しかし、時間が経過すると共にその誤解は解け、今までの事を謝つてくれる子も出てきた。そして、みんながアトピーの事をしつかり理解し受け入れてくれるようになり、今までは違い私以外の子とも交流を持てるようになり友達も沢山出来るようになった。このような体験から私は、一人ひとりが違いを受け入れ理解をし、誤つた事実を真実にし、誤解を解く事で悲しい歴史と現状を終わらせる事を知つた。

悲しい歴史と現状を終わらせる為に私たちは、人から聞いた事を鵜呑みにするのではなく一度立ち止まって考え、理解を深め真実を知る事・自分が何かを発信したり伝える時には誤りがなければ十分注意し再確認する事・最初の印象を全てだと誤解しない事を大事にし人を受け入れていかなければならない。



最優秀賞（横浜市教育長賞）

## 気づきたい「笑顔」

横浜市立旭北中学校 三年

匿名

「○○菌だ！逃げろ〜」一人の子に向かって言い、走り出すみんな。それが、小学二年の頃のある日に始まった。私もみんなが言っていたし、言われている子も笑って「やめてよ〜」と冗談混じりに言っているように聞こえたから一緒になって言った。

それが始まって数日が経った朝、先生が

「○○さんを菌扱いした人は自分から名乗り出て。」

と、言った。すごく怒っている様子だった。その瞬間心臓がバクンッと鳴り、教室でヒソヒソと話す声が次第に大きくなっていくのを感じた。数分経っても一人として名乗り出ることはなく、痺れを切らした先生は一人ずつ名前を言っていた。呼ばれた子は「おい、お前もやってただろ！」と他の子の名前を言い、徐々に言っていた人が明らかになっていった。

だが、私の名前は呼ばれなかった。ホッとした。だって、みんなと比べて私は一、二回しか言ったことがないから、私は同じにはならない。そうだ、そうに決まっていると思いついていた時、

「あれ、○○もやってたよね？」

自分の名前が呼ばれた。頭からつま先まで冷えきっていくのを感じる。「え、私？」咄嗟に知らないふりをしてしまった。「あ、そうじゃん。言ってたよね。」という声が聞こえてくる。その声は多分小さくて、他の人には聞こえてなかったかも知れない。しかし、私の脳内にはその言葉が繰り返し返し聞こえ、嘘をついている苦しさが頭に打ちつけてくるように感じた。

言った人達が先生に怒られた後、その人達からこんな声が上がった。「なんで俺達が怒られなくちゃいけないの?」「だってあいつ笑ってたじゃんね。」「言われて嫌なら嫌って言えよ。」自分は悪くないと私達は壁を作っていた。そして、私も悪くないんだと勝手に解釈した。先生は、「今日あったこと、自分が何をしてしまったのかをちゃんと親御さんに伝えてください。」と言っていた。けれど、私は悪いことをしていないから話すこともないと自分に言い聞かせ、親には言わなかった。

次の日の朝学活で先生が、「昨日のことをちゃんと親御さんに伝えた人は手を挙げてください。」と言った。次々に挙がる手。みんなが挙げていくのを見て、私は汗が止まらなくなっていた。ここで挙げなければ私はみんなから白い目で見られる。私は小さく手を挙げた。罪悪感で包まれてその日は一日中気持ち沈んだ。

私は家に帰ったら自分がしてしまったことを親に伝えなければいけないのだと思った。でも、母にしつかり説明すればきつとそんなに怒られないだろう。大丈夫。そう思い込んで説明した。その途端、母の顔は青ざめていき悲しそうな声でこう言った。「相手は笑うしかできないかったかもしれないでしょ。笑っていたとしてもその子は傷ついていたと思うよ。」今まで作ってきた壁が壊れたような気がした。母はその言葉を言った後、その子の家にすぐさま電話をして何度も謝っていた。母からの信頼を失ってしまったこと。変なあだ名をつけてからかってしまったことの罪悪感で吐きそうになった。

私もその子に謝罪することを決意した。謝ること、その子の心の傷が治るわけでもないし、許されることではないと分かっていた。分かっていたけれど、私は謝ることしかできなかった。翌朝その子に謝りに行くとした時、拒絶されるのが怖くて足がすくんだ。でも、私のこの恐怖よりその子はもっと怖かったのだろうと思ひ出し、勇気を振りしぼって謝罪した。その子は「大丈夫だよ。」と優しい声で言い、私を拒絶なんてしなかった。その瞬間、全身についていた重りが外されたように感じた。ああ、なんてこの子は優しい人なのだろうと心から思った。

私はこの出来事を一度も忘れたことはない。変なあだ名でからかわれているときのあの子の笑顔。あの笑顔は上辺だけでは分からない気持ちがあったのだと思うと後悔が押しよせてくる。私はこの事があつてから、誰か冗談でイジラれていたとしてもその子の顔色や傷ついていないかを見て後から声をかけるようになった。そうなるようになってから周りの子達から思いやりがあるとと言われるようにもなりたくさんの良い友達に囲まれている。

私は、一生の後悔を胸に刻み、二度と同じことはしないし傷ついている人を助けようという気持ちを忘れず、今日を生きていこうと思う。





最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

## ありのままの自分を認める

横浜市立西金沢義務教育学校 八年

佐瀬 凜

一年生の十二月、私は学校に行けなくなった。顔を上げて歩くこともできず、校門で人の気配がするだけで足がすくんだ。

周りの人は、「不登校になった理由や原因」を問いかけてきた。その「理由や原因」が分かれば、不登校が解消されると考えてのことだと、今の私なら理解できる。でも当時は、その質問が嫌で苦しくて仕方がなかった。なぜなら、自分でいくら考えても、その答えが分からなかったから。本当は私だって学校に行きたいのに…そのうちに、考える事が面倒になり、心を閉ざしていった。

今でも、その質問の答えは、はっきりと分からない。一つだけ言えることは、不登校を経験したから今の自分がいるということ。

「学校に行けない私はダメな私」と思い込み、自分が嫌いだった。「こんなはずじゃない」「こんな自分は認めたくない」という気持ちばかりが押し寄せ、人と比較することや勉強が遅れてしまうことばかりが気になっていた。自分で創り上げた「理想の私」に縛りつけられていた私は、「現実の私」を受け入れずにいた。自分の心と向き合うのが怖く、避けていたのだ。でも少しづつ、不登校のあるがままの自分を認めていくことで、

前を向くことができた。休み中に手紙をくれた友達。保健室を毎日たずね、声をかけてくれた先生。周りの支えがパワーとなり、一歩踏み出すことができた。

競泳の池江選手は、私の憧れだ。その池江選手は、二〇一九年二月に白血病を発症。一年以上にわたって闘病生活を送った。二〇二〇年二月には、四〇六日ぶりにプールに入る姿をSNSで発信し、そのやせ細った体つきには驚きをかくせなかった。病名を告知された時は、「五輪、金メダルという言葉から解放されて、ほっとした。」という池江選手だが、抗がん剤治療では髪が抜けると告げられ、初めて涙したと聞いた。そんな池江選手が五月には、ウィッグや帽子をはずした「ありのままの姿」を公開した。その姿は、最高にかっこよく、息を飲む美しさだった。

「病気になって髪の毛がなくなっただけ、髪がないことは恥ずかしいことではないし。むしろ、今しかないこの瞬間も大切にしたいかった。」

「ありのままの姿」を見せることは、決して恥じることではないと、私の背中を押してくれた。

「ありのままの自分」を受け入れることは、他人のありのままの姿を受け入れることにも繋がっていると思う。なぜなら、「マイナス」を「プラス」に変えるのは自分の意識次第だと気づいたから。本当の自分と向き合える人は、他人の痛みや弱さを感じることができるとだ。

私は、今までの経験が決してマイナスではないことを発信していく。池江選手は、「ありのままの自分」をさらけ出すことで、周りを勇気づけた。私が今回の経験を包み隠さず話していくことで、苦しんでいる人もありのままの姿を見せやすくなるのではないか。その輪が広がっていくことで、同じような境遇にいる人も声を挙げやすくなると思う。

不登校になった頃、その事に負い目を感じて、学校以外の所で楽しむ資格はないと考えていた。でも、毎日水泳に行き、体を動かすことで、リフレッシュできた。又、その友だちと遊園地など外に出かけたりして、少し胸のつかえがおりましたように感じた。楽しい一日を過ごすことで、前を向きやすくなった。そこで私は、学校以外にも居場所がある、不登校でも楽しく過ごしてい、と伝えていきたい。

世界に目を向けると、毎日のように目を覆いたくなるような悲しいニュースが飛び込んでくる。文化言語、姿、出身、考え方、それらのささいな違いから、あらゆる差別や対立が生まれ、地域同士、あるいは国同士の戦争や紛争につながっているのが現実だ。更には、それにより、全く関係のない人々が多大な被害を受け、命を落とすケースも多いと聞く。

誰もが、人として尊重され、自由に安心して生きる社会への実現は、果てしなく遠い理想なのだろうか？ いや、そんなことはない。「ありのままの自分」を受け入れることが、第一歩だ。人と人が認め合い、誰もが共存できる社会こそが、「平和な世界」と言えるだろう。

今回の経験を通して、ありのままの自分を認め、自分の足で立ち上がったことは、大きな自信につながった。

私は今、「平和な世界」の実現に向けて、一步を踏み出す。



最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

## 認知症は恥ずかしくなかない

横浜市立瀬谷中学校 三年

友<sup>とも</sup>田<sup>だ</sup>未<sup>み</sup>来<sup>く</sup>

五月、曾祖父が亡くなった。曾祖父は五年前から認知症を患い、家族で介護をしていた。

私は生まれた時から曾祖父と住んでいた。おちゃめで優しく、家族思いでいつも周りのことを考えている曾祖父だった。勉強も遊びもいつも全力で教えてくれた。笑顔で接してくれる曾祖父が大好きだった。

認知症と診断されたとき、私は曾祖父の力になりたくて認知症について勉強した。認知症の進行を少しでも遅らせることができるように、本を買って調べたり、家族で接し方を考えたりした。私も曾祖父を支えようと力を合わせていくことを決意した。

しかし、現実とは想像と違った。食事を食べこぼしたり、部屋のいたるところで排尿をしたり、服を脱いでしまふことが当たり前になっていった。家族の介護を拒否して暴力をふるったり、目を離れたすきに外に出て行ってしまふことも増えていった。曾祖父は家族に止められるたびに、苦しい顔をして何か言いたそうだった。でも、曾祖父はもう言葉を話すことはできなかつた。

お世話になった曾祖父のために力になりたいと思っていたのに、私はだんだんと曾祖父と過ごす時間が苦痛に感じるようになった。今思うと自分でも信じられないが、汚いとか気持ち悪いとさえ思うこともあった。思

いたくないのに、思わずにはいられなかった。曾祖父は昼夜がわからなくなり、一日中誰かが曾祖父のそばに  
ついている状態だった。家族皆がどんどん疲れていった。

ある日、外に出ようとしたり曾祖父に対し、曾祖母が、

「恥ずかしいからやめて。」

と言った。また、近所の人は曾祖父を見て

「大変ね。かわいそうに。」

と言った。私はもやもやした。曾祖父は恥ずかしくも、かわいそうでもない。認知症に対するイメージの悪さ  
を感じ、悲しかった。しかし、自分も同じイメージをもってしまっていることに気づき深く反省した。

私は認知症になる前の曾祖父を忘れてしまっていたと感じた。曾祖父の力になりたいと決意した自分の気持  
ちも薄れていた。汚いとか気持ち悪いという感情をもってしまったことが恥ずかしくなった。

それから私は、出来る限りの時間を曾祖父と過ごした。外に出ようとしてしまうときは、車いすで散歩に出  
かけたり、膝に乗り話しかけたりした。昼間寝ようとしたときは、豆を箸でつまむ練習や塗り絵に誘った。食  
べこぼしても、食事を美味しく食べることができてよかったと、心から思えるようになった。

多くの認知症は、治ることはない。介護はものすごく大変で、時間も労力も必要である。でも家族や自分の  
周りの人が認知症になったとき、忘れないでほしい。その人がどんな人であったかということ。家族の中で  
曾祖父は夕食の買い出し当番であった。外に何度も飛び出してしまうのは、きつとその習慣が身についた  
からだと母は言った。

高齢者だけでなく若年でも認知症になることはある。大切な家族や知人が認知症になったとき、その人が最

期のときを迎えるまでその人らしく生きられるように、尊厳が守られるようにするためには、周囲のサポートが必要である。私は、曾祖父と過ごしたことで一人でも多くの人に、社会全体に認知症について考えてもらいたいと思う。バリアフリーの環境やサポート体制を整えて過ごしやすい未来になることを願っている。



最優秀賞（横浜市人権擁護委員会会長賞）

## 「障がいにも個性」

横浜市立末吉中学校 三年

宇田章悟

「トントントン、トントントン、トントントン。」

僕の祖母の足音は不規則だ。祖母は歩き出して間もない一歳の頃にポリオウイルス感染し、脊髄性小児マヒになった。高熱が数日間続き、とても心配する家族を安心させる程に回復した時には、祖母の右足のアキレス腱は溶けて無くなっていった。脊髄の一部に入り込んだポリオウイルスは強い炎症を起こすだけでなく、四肢やその骨や関節に発育障害を起こす。その後遺症が祖母の場合は右足に残り、アキレス腱の消失と左足より右足の方が2cm小さく、股関節も未発達となった。

とはいえ、僕が知る祖母は自転車にも乗るし、杖も使わずに歩き、階段もゆっくりだが昇降できる。歩く時の不規則な足音も、身体が上下することも、僕にとっては物心ついた時からの変わらない祖母の姿であり、日常だ。祖母の家に遊びに行くと、祖母は家事を何でもこなすし、僕達孫の世話もしてくれたのだ。

しかし、祖母を健常者とはほぼ変わらないと思っていた僕は、ある時気がついた事があった。食事を食卓へ並べる時に、祖母の娘である母が、味噌汁やお茶などといった液体をいつも率先して運んでいるのだ。そして、祖母は取り皿やご飯を運んでいる、と考えながら、僕はハツとした。祖父に頼まれてお茶を運ぶ時、壁に手を

つきながら慎重に歩く祖母の姿を思い出したからだ。歩く時に、アキレス腱の無い右足の踵はぐにやりと横に曲がるので、どうしても身体が上下に大きく動き、左右に揺れてしまう。そんな祖母にとって、液体を運ぶことはとても苦手なのだ。

幼い頃から祖母と暮らしていた母は、当然のようにその事を理解して、代わりに運んでいたのだ。僕は気付いた事を母に確かめてみた。母は、「ああ。当然で、自然な役割分担で気になかったけど。おばあちゃんは出来る事が多いけど、苦手な事は代わりにしたり、手伝ったりするよ。小さい頃から当たり前だったからね。」と、大した事ではない口ぶりで話した。僕にとってはそれが大きな発見と驚きであり、でも、母にとっては「当たり前」だったことに更に驚いた事を今でも鮮明に覚えている。

それ以来、僕も気付いた時は率先して、祖母の代わりに液体を運ぶように心懸けた。祖母の苦手な事を代わりにしてあげるくらい優しいんだと自分を誇りに思いもした。「他に何をすれば良いの。」と聞くと、「よく分からないなあ。その時の状況にもよるし、やり過ぎたらお節介になるっておばあちゃんにも言われたし。」と返された。そして最後に「障がいにも個性があるのよ。」と言われたが、その時の僕には意味が分からなかった。

その意味を知ったのはある車イスの男性を特集した番組を観た時だ。男性は奥様の第一印象を聞かれ、「食事会で隣になった時に、手伝うことがあったら言っただけ、と言われた事が心地良かった。大変でしょ、と手助けしようとしてきたり、逆に健常者と差別しないから何も言わないよ、という態度でもなく、受け身の立ち位置がとても心地良かったんです。」と答えた。僕は「なるほど。」と思った。母も男性の奥様も「障がい者」として一抱りに考えるのではなく、障がいを持つ「一個人」として尊重しているのだ。同じ車イスに乗っていて



も、足が不自由でも、苦手な事もできない事も同じではないのだ。これこそが母の言っていた「障がいにも個性がある」ということなのだと思う。

例えば、高い所の物を取る時に踏み台を使う。その踏み台に必要な高さは身長や腕の長さで違ってくる。

「障がい」も同じで個々でそれぞれ違う。これが「障がいにも個性」だ。

障がいは苦手な事は協力が要だし、出来ない事は代わってもらおう事が必要だ。しかし、出来ない前提で始めから接する事は一個人を見ず、「障がい者」だからと自分勝手な優しさの押しつけとなり、大変失礼なのではないだろうかと思える。

なぜこんな事が起こるのか。それは、僕もそうだったように障がいに「かわいそう」という気持ち先立つからだと思う。そのせいで僕達は思い込みからくる優しさを押しつけてしまう。それは絶対避ける必要がある。

最後に僕が伝えたいのは、障がいには「個性」があり、それを「受け身の優しさ」で助けてあげるといこととです。普段健常者同士なら普通にできている、自分に出来る事と出来ない事を見極め、お互いの短所を長所で補うという行為がそこに障がいが加わるだけで「不自然な気遣い」へと変わってしまう。だから、「障がい者」としてではなく、「障がいを持つ一個人」として接することで、二者間での隔たりが狭まるのではないだろうか。

社会全体で障がいの有無に関係なく個々を理解し、認め合える日が訪れるように僕は願っている。



最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

## 互いの違いを理解して

横浜市立あかね台中学校 一年

金<sup>かね</sup>子<sup>こ</sup>彩<sup>あや</sup>奈<sup>な</sup>

「多様性と調和」が大会目標として掲げられた東京オリンピックは、トランスジェンダーアスリートが、自己認識する性別で出場した初の大会として話題となった。しかし、もし私自身が出場選手だったらどう感じるだろう。生まれ持った性別は違うけど心の性別は同じだからと、トランスジェンダーの選手と同じ土俵で闘うことになれば、私はその事実を受けとめることができなと思う。

私は最近、そうした状況に苦しむアメリカ人の女子高校生陸上選手、セリーナ・ソウルさんのことを知った。彼女は幼い頃から陸上競技を続けていて、今では全米トップレベルで活動するほどの実力の持ち主だ。しかし、大学の奨学金獲得がかかったレースで、彼女の前に二人の新たな選手が現れ、勝つことができなくなった。その選手たちはトランスジェンダーで、生まれ持った性別は、彼女より運動能力の優れた男性だった。彼女は生物学的に明らかに優位な体格を持つ選手たちを同性選手として受け入れることができず、異議を申し立てた。セリーナさんの例をはじめ、全米各地で、トランスジェンダーアスリートの大会参加が、大きな問題となっている。

過去には、トランスジェンダー選手の競技参加問題はなかったのだろうか。これまでも、生物学的には男

性だが、女性として大会出場を希望する選手はいたのかもしれない。しかし、トランスジェンダーの概念が一般的ではなかったため、そうした事実が世に広まることがなかったのだろう。

現在は「ジェンダー平等」の世の中となり、スポーツ界でも自分がトランスジェンダーであることを公表する人が増えてきた。その結果、平等で明確なルールが定められることなく、トランスジェンダーアスリートの心の性別で種目に参加できる大会が増えた。そして今回のセリーナさんのように、心と体の性が一致しているシスジェンダーの人たちが苦しむような問題が起きてしまった。

私は「ジェンダー平等」という考えには賛成だ。どの性別で生きるのか、どうやって自分らしさを表現するのか、という意味で、すべての人に、自分が好きなように生きる権利があると思う。同性と結婚したり、男性がメイクしたりするのは、その人がどんなものを好むかであって、自分自身が幸せならそれでいいのだ。しかしスポーツ界でのジェンダー平等の考え方は、逆に不平等を生む可能性があると思う。どうしても生物学的には、男性の方が女性に比べ身体能力という意味では優位だ。その点から、トランスジェンダー女性と同じレースで闘うことをしいられた、シスジェンダー女性の平等に闘う権利はどうなるのだろう、と感じてしまう。

私は陸上競技部に所属している。もし男女が同じレースで闘って順位争いをすると言われたら、やはり順位は性別で区別してほしいと感じる。理由は男女で身体能力が違い、自分と同じ条件を持つ仲間と闘う権利が私にもあると思うからだ。

同じものと違うものを分けること、それは「差別」ではなく「区別」である。差別と区別の違いを明らかにし、区別するべきところはしっかりと線を引くことが大切だ。きちんと区別をすることでより平等な判断ができるようになると思う。しかし何を基準に線を引けばよいのだろうか。全員が納得できる線引きをするこ

とは難しい。

だからこそ、公正な試合を行うために必要なのは、セリーナさんのような立場の人、トランスジェンダーアスリート、大会の運営者、この問題に関心を持つあらゆる人が話し合える場を作っていくことだと思う。あらゆる立場の人が互いの意見を聞き、理解し合い、受け入れれば、それぞれの主張を少しづつ歩み寄らせることができるのではないだろうか。

お互いを理解し合い、受け入れることによって、スポーツ界に限らず、多くの人が住みやすい、差別の少ない社会になっていくと信じたい。私一人の力では、スポーツ界の制度を変えていくなど、大きな変化をもたらすことはできない。しかし、私にもできる小さなこと、つまり身近な人々の個性を理解し、自分と違うことを受け入れ、尊重することを大切にしていきたいと思う。そしてより多くの人に気づいてもらいたい。自分と違う意見を理解し受け入れ、区別すべきところはしっかりと分け、差別という誰も幸せになることのないものが、少なくなっていくべきだということ。



最優秀賞（横浜DeNAベイスターズ賞）

## 支え合い

横浜市立もえぎ野中学校 三年

塩しお田だ千ち陽はる

「おはよう。」温かな笑顔を浮かべ私にいつも声をかけてくれる同い年の女の子がいる。あの子と出会ったのは六年前。私達は小児科に定期的に通っていたため親しくなった。私の顔をじっと見て相槌を打ちながら話を聞いてくれる彼女は私よりも大人びてみえた。あの子と話せること。それがいつの間にか私の通院への活力となっていた。

小学校六年生の時、新型コロナウイルスが猛威を振るった。通院の回数は減り、あの子と話すことも少なくなった。その時からだろうか。あの子は私を見るなり俯き、小走りで私の横を通り過ぎるようになった。ある日、私は診察室を後にするとあの子と鉢合わせた。私は途端に彼女を食い止めるように喉から飛び出た。「おはよう。」けれどあの子の温かな笑顔は返ってこなかった。私も思わず唇を噛みしめ、涙を堪えた。

「私耳が聞こえないの…。」彼女は泣き出しそうな弱々しい声で私に言った。私は耳を疑った。今まで楽しく話していた彼女に聴覚障がいがあることに驚きを隠せなかった。コロナ禍でマスク生活になったことで読唇術が使えず会話が難しかったとその時初めて教えてもらった。「なんで教えてくれなかったのかな。」私は彼女に聞いた。「聴覚障がいがあるって言うだけでみんなが私を特別扱いしてよそよそしくなる。それに何でもやっ

てくれるたびに自分が何もできていないことを辛く感じる。私は一人の友達として普通に過ごしたい。」私は胸がギュツとなった。障がいを持つている人に対して「助けなければいけない存在」と心のどこかでは健常者とさりげなく区別している自分があるのではないかと。耳が不自由な人でもあの子のようにマスクをずらしたりするなど少しの工夫で解決することも私が気づかないうちに何でもやってしまうことで生きづらさを与えてしまっていることもあると気がついた。障がいを持つていても持つていなくても一人一人が難しいこと、苦手なことがあつて誰もが完璧ではない。不器用な私は糸通しなどの細かい作業が苦手だ。けれど、そんな時は器用な彼女が助けてくれる。縄跳びができなかった時もあの子が一生懸命教えてくれてできるようになった。障がい者だからと頼つてはいけないのだろうか。私はお互いが自分の難しいこと、苦手なことを補い合つて過ごすことが必要なのだと思う。

あの子が私に打ち明けてくれた日から、私達の心の距離は縮まった。聴覚障がいを隠してきた彼女が私に心を開いて話してくれたことが何より嬉しかった。私はその日からもずっとあの子との何気ない会話を続けている。彼女が人に頼つた時に「ごめんね。」と悲しい顔を浮かべて謝つていたはずがいつの間にか「ありがとう。」と温かな笑顔に変わり安心した。

彼女のように誰かに頼ることが「申し訳ない。」と思う人が少なくなり、障がいの有無に関わらずお互いが助け合う存在であればいいと思う。私はこれからも彼女といつでも助け合える友達でいたい。最後に、「いつも温かな笑顔で助けてくれてありがとう。」



最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

## 社会の一員

横浜市立川和中学校 三年

安岡優愛  
やす おか ゆ あ

「もしかして、弟って障害者なの？」

過去に友達にそう聞かれたことがある。私がそうだと答えると、その友達から申し訳なさそうに

「そうだったんだ、ごめんね。」

と謝られた。

確かに、私には、知的障害を持つ弟がいる。けれど、最も軽い程度で、言葉も流暢に話すことができる。そのため、外で一緒に歩いていても障害者だと気づかれることはないだろう。そんな弟を見ていて、特に生きづらそうだと思うことはない。だから私は当時、友達の反応から障害者だから辛い人生を送っていると思われるように感じて怒りを覚えていた。

弟は十年ほど療育に通っていたため、私は付添で小さい頃から同年代の障害を持つ子どもと関わる機会が多かった。言葉を話すのが苦手な子や得意な子、独り言を言ってしまう子、突然走り出してしまいう子など様々な特性を持つ子どもがいる。しかし、先生が声をかけたら、すぐに保護者とともに準備から片付けまで協力して行っている。時々、抜け出して遊んでしまう子がいても、他の友達がこっちだよ、と教えてあげていた。上手

にコミュニケーションをとることが難しくても、全員が同じ時間を楽しんでいるようだった。

だから、障害者だから何を言っても伝わらない、何もできないという考え方はおかしいと思う。障害というのはハンデであっても、不幸の要素では決してないのではないかと。

六年前にニュースを見ていて、相模原障害者施設殺傷事件の内容が報道されたとき、私は思わず息を呑んだ。隣の市の障害者施設で二十人近くの尊い命を奪われた、その現実が受け入れられなかった。そして、犯人は過去に勤務していた職員だと知り、近くですつと障害者の方を見てきたはずにも関わらず、なぜこんなことができるのかと失望に近い感情を抱いた。何も罪のない、一生懸命に生きようと前を向いている人が辛い思いをする現実が許せなかった。また、もし弟も同じ思いをしてしまったら——。そう思うと、とても他人事には感じなかった。

このニュースを通して考えたことは、障害者だから辛い人生を送っているのではなく、障害者という理由で周りの人が辛い人生だと決めつけたり、そうさせたりしているのではないかと。障害は単なるハンデでしかなく、ハンデを少しでも減らして幸せに生きる手助けをする場所が障害者施設であるべきだ。

障害者が幸せに生きることができるとは何かが必要なのだろうか。私はあるとき、そんなことを考えた。障害者が多くの人から理解を得られる機会が、そもそも少ないのではないだろうか。

私が通う中学校では、クラスの数が多いため、個別級に通う生徒と同じクラスになることはあまりない。また、普通級との関わりは学校行事や総合の授業のときだけであるために、個別級の生徒と一度も話したことがない人も多いと思う。

昨年、個別級に通う男子生徒と同じクラスだった。時々総合の授業で一緒になるとときには、いつも私だけで



なく多くのクラスメイトが久しぶりだね、と彼に挨拶をしていて、近くの席の人は黒板に書いてある指示を教  
えてあげていた。個別級に通う生徒もクラスの一員として、困ったときに助け合える、そんな空間が私には温  
かい場所のように思えた。

しかし、個別級に通う生徒と関わる機会のない人は、自分とは関係のない人達だと思っているのだろうか。  
独り言を言いながら歩いている個別級の生徒と廊下ですれ違っても、少し視線を移すだけで、挨拶をされても  
無視をして素通りしてしまう。同じ学校でも、障害を持つ人に対して様々な対応をする人がいる。それが今の  
現状だ。

障害者がより多くの人から理解を得られるには、まず学校の取り組みとして、個別級の生徒との交流を増や  
すことが必要だと思う。一緒にすべての授業を受けることができなくても、全校生徒参加のイベントなどで同  
じ時間を過ごすだけで、有意義な経験になると思う。また、障害者に対する間違った固定概念をなくすことも  
障害者が生きやすい社会につながるといえる。そのためには、私たちが積極的に正しい情報を知るための努力  
をする姿勢が求められていると思う。

障害を持っていても、同じ社会の一員として、みんなと同じように幸せを手に入れられる社会にしていきたい。  
今の私にできることは、障害を持つ人のことをさらに理解して、どんな時でも臆さずに手を差し伸べられ  
る人になることだ。障害の有無に関わらず、幸せな人生を送れるように、多くの人がたがいに助け合える社会  
に少しでも近づいてほしい。



最優秀賞(横浜FCニッパツ横浜FCシーガルズ賞)

## 一人の勇気で

横浜市立あざみ野中学校 三年

齊<sup>さい</sup> 藤<sup>とう</sup> 輝<sup>き</sup> 恵<sup>え</sup>

私は生まれてから四歳までドイツにいました。日本へ帰国した後は小学校六年生まで日本のドイツ人学校に通っていました。入学当初は「何人(なにじん)だから。」という差別は全くありませんでした。しかし、学年が上がり、皆が見た目を気にし始めるにつれて、私への態度が変わっていきました。

私の両親は日本人で、私の見た目はもちろん黒い髪に黒い目と、周りの子達とは全く違いました。そのため「気持ち悪い。魔女みたい。」と毎日のように言われ続けました。私はなぜ急にそんなことを言われるようになったのか、全くわかりませんでした。少し見た目が違うだけなのに。皆同じ人間なのに。

しかしそんな私にも、唯一心が安らぐ大切な場所がありました。夏に一週間だけ通っていた日本の小学校です。そこでは皆同じ髪の色に目の色。「私と同じだ。」と思わせてくれました。でもここでも一つ問題がありました。私は日本語を上手に話せなかったのです。毎日ドイツ語ばかり使っており、日本語というと私にとって家族と会話するだけのものでした。だから当然授業についていけなかったり、せつかく友人が話しかけてくれたのに話の内容が良く理解できなかつたりして、たくさん迷惑をかけてしまいました。ところがこんな私を日本の小学校のクラスメイトは温かく迎えてくれました。一緒に話している時に分からない言葉があったら身振

り手振りでなんとか伝えてくれようとしたり、授業後に分からなかったところはなにか、聞きに来てくれたりしました。私は自分自身のことを理解するために歩みよってくれた気持ちがとても嬉しかったです。夏に一週間という短い期間だったけど、私はこの体験からたくさんのことを学びました。

そしてそれを通じて二つのことを心に決めました。それは、「最初は分かり合えなくても少しずつでいいからお互いを理解すること」と「ドイツの学校の皆が私のことを差別して何と言おうが、私は絶対に同じことはしない。人を差別しない。」ということです。

初めは皆にどう思われるか、本当にこれで私へのいじめはなくなるのか不安だったけど、みんなに接していくうちに徐々に距離が縮まり、高学年になる頃にはすっかり私に対する偏見によるいじめはなくなっていきました。

この経験から、自分の考えをしつかりもち、それを貫き通すと、周りもよい方向に変わっていくということ学びました。その、最初の一人になることは、とても勇気がいるかもしれませんが、でも誰かがやらないと、現状のまま何も変わりません。そんなことできない！と言う人は、まず小さなことからでもいいので、実行してほしいと思います。今の時代ハーフやクォーターの人も周りに増えてきていると思います。彼らの中には私以上に見た目や国籍について悩んでいる人もいるかもしれません。そんな悩みを抱えている人達に一言でも良から話しかけ、歩み寄ろうとするだけで、お互いの理解が深まり、悩みをもっていた人の心の傷は癒やされると思います。またそうすることで、新たな発見があるかもしれません。例えば「あれ？この人こんな人だったんだ。意外と話しやすいかも。」など相手の新たな一面が見えたりします。

人を見た目や自分の勝手な思い込みだけで判断しない。当たり前前だけど、当たり前前のようにできていないこ

とです。言葉や行動にする前に一度、「もしそれを自分が言われたら？」と考えてみてください。そして今差別をされて辛い思いをしている人には、「ありのままの自分で良い。自信をもって堂々としてほしい」と伝えたいです。

皆同じ人間だからと言って皆が同じなわけでもない。一人ひとり個性があり、他の人と違うところがあります。だからこそ、私達は新しい発見や考え方を学ぶことができるのです。だからこそ生きるということは楽しいのです。

「一人の行動がきっかけとなり、周りを変える。」私はその最初の一人になり、それぞれの個性が尊重され、皆が生きやすい世界にしたいです。そして、この考えを日本中、世界中へと広めていき、私のように差別され、悩んだり、苦しんだりしている人に一人でも多く手を差し伸べてあげられるようにしたいです。一人の行動が世界を変えるきっかけになるかもしれない。その最初の一人に私はなりたいと思います。



最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

## ジェンダー『平等』より『レス』へ

横浜市立六浦中学校 三年

屋比久やびく  
由梨香ゆりか

今日まで様々なメディアを通して私達に伝えられてきた、二〇二五年までに世界で達成が求められているSDGsの中には、次のような目標が掲げられている。

『ジェンダー平等を実現しよう』

この目標のおもな内容は、「現在社会的に弱い立場にある女性の地位を向上させ、男性と同等の環境で能力を活かせるようにしよう」というようなものである。

私は、この目標に対して異議を唱えたい。

もちろん『ジェンダー平等』というのは、今後私達がお互いを認め合い平和に生きていくうえで、確かに大切なことだと言えるだろう。だが、私が疑問に思ったのは、この目標の中には『男性』と『女性』という、二つの性別しか登場しないことだ。ましてや、ここでは正式に国や機関から『女性』と認められた人にしか焦点が当てられていない。このままでは、これからの私達の世代やその子孫達が生きていくうえで、その未来をより明るくするどころか、これまで以上に苦しい思いをする人が増えていってしまうのではないかと私は危険を感じた。

そこで私は、これからの多様性の時代に向け、『ジェンダー平等』よりも『ジェンダーレス』な社会を目指していくべきだと、強く訴えたい。

私の後輩が以前、こんな話をしてくれた。彼女は私の一つ下の学年で、中学校に進学する際、制服としてスカートとスラックスの両を購入し、実際にその二つをそれぞれ着用しているそう。しかし彼女は、自分がスラックスをはいていることで、一部のクラスメートの女子生徒に避けられていると話した。

確かに現代では未だ、制服は『男子生徒』と『女子生徒』という二つの性に合わせて区別される見た目になっており、『男子生徒』のものというイメージの強いスラックスを着る『女子生徒』の数もそれほど多くないため、私の後輩のクラスメートも恐らくはそういったスラックスを着用する女子生徒の見慣れなさから、彼女を避けてしまっていたのだろう。

ここまで書いてきた上で私が伝えたいのは、『見た目や服装で人を差別してはいけない』というようなことではない。そもそもその制服の段階で性の区別がつけられないような工夫がされていれば、彼女に起こったようなトラブルが防げるのではないかとということだ。

例えば、私達が体育の授業で着るような体育着やジャージは、性別を問わず全ての生徒が同じデザインのものを着用している。また近年では、『男性』や『女性』の体形の差が目立たないよう工夫が施された水泳授業用の水着が開発され、都心の一部の学校に導入されたりもしている。

それらと同じように、学校制服も、例えその人がどんな『性』であったとしても着られるような、全生徒統一のデザインのものにしてみるといいのではないかと私は考えた。そうすれば、私の後輩がスラックスをはいたことで感じた仲間外れにされるような風潮は、ぐんと減っていくだろう。

彼女は他にも、私にこう話してくれた。

「スラックスをはくことで女子に避けられたりもしたけど、代わりに、同じものが好きな友達が男女問わずにできました。」

私は彼女が性別を問わず仲間をつくれたように、これからの時代は『性別』という概念を取り払い、個人個人が一人の『人』としてお互いを尊重していくことが大切だと強く思う。この考え方が広まれば、自分の性に対して疑問を持っていたり、『男性』や『女性』といった性に当てはまらない性を持っている人だけではなく、LGBTQ+といった性的少数者と呼ばれる人々や、出身地や肌の色で差別を受けてきた人々も皆平等に生きることができ、これまで起きてきた悲しい事件や出来事をくり返さない為の大きな予防につながっていくのではないかと、私は想像をふくらませた。

今揚げられているSDGsの目標を達成した未来が、一体どのようなものになっているかを、貴方は考えたことがあるだろうか。一度その未来を想像し、それが本当に持続可能な社会であるかをじっくり考えてみて欲しい。そして実際に全てのSDGsの目標を達成した未来が、たくさんの人の笑顔であふれていることを私は願っている。



最優秀賞（横浜キヤノインーグルス賞）

## 世界を幸せにする第一投

横浜市立南高等学校附属中学校 一年

工藤 菜南  
く どう かん な

「障がい」と聞くと視覚や聴覚といったいくつかの種類を思い浮かべますが、それらを抱えて生きている人がどれくらいいるのか私はあまり考えたことはありませんでした。気になって調べてみると、地球人口の約十パーセント、十億人の人は何らかの障がいをもって生きているそうです。十人に一人というと、クラスに一人よりも多いです。私達誰しもに辛いことや時はありますが、障がいのある方には苦しい場面が更に多くあるかも知れません。私はその十億人を含めた全員で、世界を、分け隔てを感じない、幸せを感じられる社会にしたいと思います。そこで、障がい者スポーツの祭典であるパラリンピックとその競技について考えました。

私は小学生の時、「楽そうだから」という理由で福祉ボランティア委員会に所属しました。その委員会は、学校のごみに関することや、障がいに関することについて活動していました。私は当初、面倒くさがって真面目に活動していませんでしたが、パラリンピックの魅力をポスターで皆に伝えるという活動に出会い、それがもともと「ポッチャ」という競技を知りました。

もともと、パラリンピックの存在は知っていました。けれども「名前を聞いたことはあるけれど、詳しくは知らないな」という程度の認識で、ポッチャについては意識したこともありませんでした。



ボッチャはヨーロッパで生まれたスポーツで、重度脳性麻痺者、または同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されました。ジャックボールと呼ばれる白いボールをめがけて、赤・青それぞれ6球ずつのボールが投げられたり、転がされたりして、ジャックボールに近付けることを競い合います。ルールの簡易さが評価され、1984年からパラリンピック公式競技になっています。日本もメダルを獲得したことがあり、近年知名度が高まっています。この競技は、障がいによってボールを投げることができなくても、ランプという道具を使い、自分の意志を介助者に伝えて参加することができます。そのため性別、障がいの有無、年齢、生まれた国、文化の違いなどを超えて楽しむことができます。私はこの競技やルールを知って、「この素晴らしいスポーツをみんなに伝えたい」と思うようになりました。しかし、委員会活動ではボッチャについてのポスターを作成しても興味を持ってくれる人はごくわずかでした。そこで、先生に許可と機会を得て、実際に学校で競技を実施してみました。

実際にプレーした多くの人から「楽しかった」「パラリンピックに興味を持った」と感想を伝えられ、競技やパラリンピックに触れるきっかけになったことは本当に嬉しかったです。けれどこれはあくまで最初の一段、知ってもらおう、という活動に過ぎません。障がいのある方とプレーしたわけでも、彼らと共に活動したり彼らを支援したりしたわけでもないのです。ですから私は今、中学生として、より大きな活動ができないか考えています。

それは、生徒会の目安箱に、「ボッチャを、全校生徒のみんなや、地域の方々、障がいのある方々と体験する会を開きたい」と投書し、それを実現することです。ボッチャに関するビデオ等を見てもいい、ボッチャを広めることはもちろん、ボッチャを通して人と人とが繋り合える、そんな結果を伴う「行動」を、私は大切に

していきたいです。

今、私は、小学校で、福祉ボランティア委員会に所属することができて本当に良かったと思っています。障がいやパラリンピック、ボッチャについて何も理解していなかった私のような人でも、知ることをきっかけに考えることが大きく変わり、実際の行動が大きく影響されることもあります。「楽そう」という不純な動機で委員会に入った私でしたが、むしろその活動を通して「苦しむ」人の存在を知り、その方々も含めた人々が見なで「楽しむ」術を見つけ出そうとしていくことに繋がりました。

パラリンピックは四年に一度。けれども人間が自分自身や障がいと向き合うのは毎日です。だから私は、これからもパラリンピックや競技の魅力の深さを知り、伝えながら、誰しもがより幸せに生きられる世界を模索していきたいと思います。中学生の私には、人類全体の幸福なんて大それた目標を掲げることはできないけれど、みんなの幸せというジャックボールのなら、私なりの赤いボールや青いボールを投じて、近付いていくことができる気がします。それには共にプレーする仲間が必要です。障がいの有無、性別、年齢、国籍は問いません。みんなと一緒に投げ掛けましょう。それがきつと世界を幸せにする第一投になると私は信じています。



優 秀 賞

## 名前は宝物

横浜市立市場中学校 三年

安藤 リアナ

みなさんは、自己紹介をするとき始めに何を言うだろうか。自分の持ち物には何を書くだろうか。それはきつと名前だと思う。名前には自分の印象、個性が乗っている。さらに私達は周りの人達と名前を通して関わっている。私は、名前の大切さを伝えたい。

まず、この作文に出会った人は気付いたと思う。そう、私の名前はリアナ、カタカナだ。これに加えて茶色の髪と瞳、そこそ白い肌によって、初めて会う人のほとんどからは、「ハーフ？」と聞かれる。私はこれに對して「日本人と日本人のハーフです。」なんて答えたりして楽しく会話するのが好きだ。そんなカタカナで周り少し違う自分の名前が私は大好きだ。だが、もし私と同じようにカタカナの名前で、ハーフかどうか質問されるのが嫌、自己紹介するのが怖い、自分の名前が嫌いになった、などの悩みを抱える人がいたら、この「ハーフ？」という軽い質問だって、相手を傷付ける立派な人権問題になってしまうのではないかと考えた。さらにこれが名前によるいじめなんかに繋がってしまったら、本人も、本人の親も傷付けてしまうだろう。

次は、キラキラネームを持つ人の体験談を紹介する。まずキラキラネームとは、読めないような漢字を当てたり、外国人の名前を漢字に当てはめたりした名前のこと。調べてみると、びちちゅう光宙、ありえん泡姫、だいや奇跡、ていあら王冠姫など素

敵な世界観の名前がたくさん出てきた。今回紹介するのは、宇宙と書いて「こすも」と読む男性。同じ名前の人と会ったことはなく、今はその名前を気に入っていると言う。しかし小学校くらいときは本当に嫌だったらしい。一度で呼んでもらえないのがめんどくさかったり、思春期だったため名前の話題になることも気にしていたからだ。さらに周りからかわれることが多くなると、母に、「なんで宇宙なんて名前にしたんだよ。」と思ったこともあったと言う。今、その名前を気に入ることができた理由は、すぐに人に覚えてもらえて、自己紹介するだけで笑いが取れるようになって、自分の名前のポジティブな面に気付いたからだと話していた。そしてこの方のお母さんの話によると、宇宙こすもという名前へ込めた想いは、宇宙を意味する英語「cosmos」には調和や秩序という意味もあって、そこから心が広がって、それでいてみんなに調和をもたらずような、そういう子に育ってほしいと考えたそう。私はこの話がすごく深く、素敵だと思った。自分の名前や生まれ持ったものを好きになれるかは、性格や周りの環境が大きく関係していて、好きになれたことで人生をより華やかに楽しくすることができると考えた。

私はみなさんに、自分の名前を好きになってほしい。そして周りの人の名前も、大切にしてほしい。そうすることで、自分の名前に自信を持つて生きることができないのではないだろうか。私が話した二つの事例のように、名前で人をからかったり、人が嫌な気持ちになることは、私は絶対に許せない。そのようなことが起きないためにも、親が悪意を持って名付けるなんてあつてはいけないことであり、互いを尊重し認めあうことが重要だと思う。私は、誰もが自分の名前を、生まれてきた自分自身を好きになれる世界になってほしい。あなたの名前を教えて。それはあなたが生まれて始めて受け取った大切な宝物。



優 秀 賞

## 本当の「親切」を目指して

横浜市立新井中学校 三年

上<sup>つえ</sup>村<sup>むら</sup>彩<sup>あや</sup>乃<sup>の</sup>

「親切」に接すること。高齢者に接する時は親切な行動が当たり前だと思っていた。しかし、その親切が無理矢理なものになっていないだろうか。本当の親切と履き違えていないだろうか。私は最近になってこのことに気づき、考え始めた。

私のおじいちゃんは認知症だ。定年退職やコロナの流行により趣味の釣りに行けなくなってしまいすることがなくなってしまったのが原因だ。一人で何かするにも不便になっていった。だからこそ、私がおじいちゃんのために何でもしてあげないと、思っていた。しかし、おじいちゃんは色々一人でやろうとすることがあった。けれど失敗することが多いからおばあちゃんに「私がやるから、何もしないで。」と言われていた。正直、けがをしたら危ないので全部やってもらった方が良いと思っていたから、私も座っていいよと言っていた。それがおじいちゃんにとっても「親切」な行動だと思っていたから。しかし、おじいちゃんはまた一人で何かをしようとしていた。何故一人でやるのだろう。大変だろうし、休んでいれればいいのに。小学生の頃に感じていた疑問が思い出され、お母さんに聞いてみると「確かに何かやっていてけがをしたら危ないけど、一人で行動することに全部ダメって言うのは、おじいちゃんにとって嫌なんだと思うよ。」と言われた時私は、

はつとした。私も自分の考えに対してそんな訳ないでしょと言われた時は、何だか全否定された感じがしてとても嫌な気持ちになった経験がある。おじいちゃんもきつと全部やってくれろというの、自分の行動にダメと言われているようで嫌だったのだろう。親切⇨何でもやってあげるではないことに気づいた。また、言い方にも注意する必要がある。例えば、私がやるからよりも「今何してるの、手伝おうか」とか道に迷っちゃうから一人はダメよりも「道分かる、一緒に歩いて行くよ」などおじいちゃんの意見を聞きつつ、困ったことがあれば手伝うよということも伝えられる言い方がベストだと考える。

おじいちゃんのしたいことができるようにするための手助けが一番の親切なのだろう。でも、やっぱりこれはおじいちゃんがやらない方がいいと思うことも出てくる。そこは、上手くコミュニケーションを取っていくことが大切である。こう考えてみると、親切というのは、なかなか難しい。それでも私に手伝えることは、積極的に行動していきたい。上手くいかなくて失敗することもあるかもしれないけれど、おじいちゃんらしく生活できるように支えていってあげたい。前のように全部やってあげる「親切」よりもおじいちゃんの行動や意見を尊重しながら支えていく「親切」を目指していきたい。



優 秀 賞

## 誰一人取り残されない未来へ

横浜市立六ツ川中学校 三年

梅<sup>つめ</sup>津<sup>つ</sup>溪<sup>けい</sup>人<sup>と</sup>

「お兄ちゃんは頑張って勉強してこうはならないようにするんだよ。」サッカーからの帰り道、私は大きな駅の近くで一人の男性にそう言われた。やせ細ってしまい血色の悪い腕、穴だらけでポロポロの服、周りにはまだ多くの人がいる中、一人話かけられた戸惑いもあり、私は愛想笑いをしてその場から逃げるように立ち去ってしまった。

しかし、その男性は次の週もその次の週も私に話しかけてきた。「先週の子じゃないか。勉強は頑張っているかい。」「また会ったね。元気になっているか。」とまるで近所に住んでいるおじいちゃんかのような感じだ。けどそんな彼に、私は「はい。」「ありがとうございます。」「もしか返すことはなかった。だが、何度も会うにつれて、彼の笑顔は増えていき、うれしそうだった。それに「みっちゃん…」と知らない誰かの名前を言うようになっていった。

やがて一カ月程がたち、私はその男性と少しだが話すようになった。「もしかしたら働かせてくれるかもしれない職場を見つけたんだよ。」と彼は満面の笑みを浮かべながら教えてくれた。たった一カ月の関わりとは思えないくらい優しくしてくれる彼のような人がなぜ苦しくて辛い経験をしなければならぬのかと胸が締め

付けられているかのように感じた。

その後も彼との話は続き一週間ほどたったある日、彼は絶望を感じさせるかのようになくもってしまった瞳でぼーっと座っていた。まるで視界が濃い霧に覆われているようだった。「大丈夫ですか。」と私は声をかけた。すると彼は5秒ほどたつてから「ああ。ぼーっとしとって気付かなかった。すまんすまん。」と糸で操られているかのようにひきつった顔で答えた。私は何があつたのかとたずねると「もう少しで働けそうだったのにコロナウイルスでなくなつちまつたんだ。」と言つた。とてもうれしそうだった彼の笑顔が頭をよぎり、悲しくなつた。それと同時に現在の世界の経済状況の悪さや社会に出る怖さも改めて知つた。その後彼は、「まあ次頑張るよ。」と言ひ残しその日はどこかへ行つてしまつた。

その次の週、私はまた彼に会つた。笑顔で昔一緒に生活していた家族や子供について話してくれた。「俺はね、昔奥さんと娘と一緒に暮らしてたんだ。奥さんの料理はどれもおいしくてね。特に肉じゃががおいしかったんだ。それに娘はとつても美人でね、大手企業に就職して活躍してるんだよ。私の自慢で大好きな娘だよ。もう一度会いたいな。」私は涙ながらに話す彼を見てとても苦しくなつた。彼は奥さんとの喧嘩を理由に離婚してしまひ当時二十六歳だった娘さんともそれ以来会えていないのだそうだ。家族のことをすごく愛していつ分、失つた悲しみがとても大きかつたのだと思う。

「でもなんで私に……」ときくと彼は、「娘のみちるの面影を感じたんだよ。」と涙を拭ひ笑顔で言つた。その時全く風はなかつたがなぜかそよ風が吹いたかのような不思議な感じがした。彼は娘も奥さんも心の底から愛していた。だからこそ再会してほしい、昔のように暮らしてほしいと願つた。せめて何か打ちこめることを、仕事を見つけてほしいと願つた。そして何より、厳しい生活を強いられる人に何もできないことが悔しくてたまら



なかった。

その話をしてから彼に会うことはなくなった。何かしてあげたかった。しかし、正直なところ何をすればいいのか分からなかった。誰か大人に相談するべきだったのだろうか。私自身で彼の助けてもらえる場所をさがすべきだったのだろうか。もし私が助けを求め大人に声をかけたとしたら、彼に手を差しのべてくれる人は本当にいたのだろうか。私は悩んだ。でも心のどこかで「こんなに勇気のいることはできない。」と黙ってしまっていた。やはり人間は少数派の意見を勇気を出して言うことができないように、周りの目を気にしてしまいう生き物なのだ。今回の私がまさにそうだった。「もし周りの大人に変な目で見られたら。」と心の底では考えてしまっていた。

私は、周りを気にせず困っている人を助けられるよう成長していかなければならないと強く感じた。でも変わらなければいけないのは果たして私のような思いをした人だけで良いのだろうか。それは違う。周りにいる人たちも一緒に変わっていかなければならないのだと私は思う。困っていたら助ける。そんな当たり前のことをできるような、しやすいような環境を、全員でつくっていくべきだ。一人ひとりが考え直そう。誰一人取り残されることのない未来のために。

今、あなたの近くに困っている人はいませんか。



優 秀 賞

## 記憶に生きる存在

横浜市立万騎が原中学校 一年

大川 康太  
おおかわ こうた

僕は、『人権』をテーマに作文を書くことになった時に、車いす生活の祖母、昨年に片足を切断した叔父など誰をテーマに作文を書くか迷いました。しかしその時、一人の友達を書いてみようと思いました。『人権』の事を考えると何故かその友達を思いだします。考えると友達と『人権』が結びつかないのです。でも、何故か胸に掛かったままなのです。

その友達はH君という名前です。H君は、小学校に入学した時、最初に出来た大切な友達です。僕に鉄棒を教えてくれたり、困っていると話しかけてくれるのがH君でした。とても優しい雰囲気で、一緒に居て安心できる友達でした。

僕の家に遊びに来ると帰る時に迎えに来るのが毎回、年の離れたお兄さん、お姉さんでした。僕はH君に沢山の家族が居るのかと思っていました。H君の家は、マンションのような大きな家でした。庭にはサッカーゴールやバスケットゴールもあり楽しそうな場所でした。実際に家の中には沢山の兄弟が居て、大家族の暮らしが楽しそうに見えました。H君もマンションのような家で、大家族の暮らしを気に入っていたようで、「ここが僕の家」といって誇らしげに紹介をしてくれて羨ましく思いました。その話を家ですると、母からH君は

施設という場所で暮らしていて、お父さん、お母さんとは別に暮らしていることを知りました。その時は意味が分からなかったのですが、今は僕の当たり前の日常とは違う中で暮らしていたと思うとH君がどんな思いで暮らしていたのか、H君の気持ちを考えると胸が締め付けられます。そんなH君は、四年生になると保健室へ登校するようになり、五年生になると学校へ来なくなっていました。一年生の時は、誰よりも学校や放課後を楽しそうに過ごしていたH君でしたが四年生の時には、皆と遊ばずに一人で積み木をして遊んでいる姿が寂しそうでした。そんなH君に話しかけると、学校の先生から「心の病気で心が傷ついているから話しかけないで」と言われて僕は戸惑い、悲しい気持ちになりました。寂しそうなH君の隣に居る先生の困っている姿に、僕は戸惑いと不安を覚えました。H君は次第に学校へ来られなくなり、五年生の時には学校で姿を見ることはなくなりました。先生に聞いても「入院している」「関わらないであげて」という説明のみで、僕は納得が出来ないままでした。

H君は、修学旅行も最後の運動会にも来る事はありませんでした。卒業式に掲示してある名簿にH君の名前がなかったことにショックでした。卒業アルバムにも名前が入っていないくて、一年生からの思い出の写真にも一枚も入っていませんでした。H君は消えてしまったのです。H君は誰よりも楽しそうに、誰にも優しく接していたのです。H君との思い出は尽きませんがH君を想うと胸が温かくなります。でも今、H君が一人で居ると思うと胸が張り裂けそうになります。温くも張り裂けそうな変な気持ちです。

今、どこに居るのか施設の先生に尋ねると、退院して他の施設へ移ってしまったとのことでした。H君は心の病という事で入院して、情緒障害児短期治療施設へ移ってしまったということでした。大人は心の病気のH君と言いますが、H君が困っていたのか、それともH君の周りにいた大人が困っていたのかは僕には分かりま

せんでした。僕の中では優しいH君です。楽しく活き活きとしたH君はいたのです。そんなH君がいた証である卒業式、卒業アルバムからも存在を消してしまった事がH君を一人ぼっちにした象徴的な事柄だと僕は思います。H君の心の病はH君の心の中にあっただのか、H君の過していた環境にあっただのかを考えてしまいます。存在を認められない中で心の病は治るのでしょうか。H君は僕に大切な事を問いかけてくれました。『人権』とは存在を認めることだと。



優 秀 賞

## 差別や偏見

横浜市立東永谷中 三年

大塚風花  
おお つか ふう か

「人権」という言葉を聞いてみなさんは何か思い浮かぶことはありますか。人それぞれ違うと思いますし、ピンとこない人もいるでしょう。しかし私は「人権」という言葉を聞くと思いついてしまうことがあります。私のお母さんは中国人で今は中華料理店で働いています。そのお店はお母さんの兄のお店で、その奥さんや、他に中国人の知り合いなどが働いています。ある日、いつもどおり営業しているとお店に電話がかかってきました。先日来店したおばあさんが忘れ物をしたと言うのです。しかしお店には忘れ物のようなものは無かったので、そのまま無いと伝えました。翌日またおばあさんから電話がかかってきて探せる場所は全て探したけど見つからなかった。あるとしたらお店しか無いと言い、お店の休憩時間に話し合うことになったのです。おばあさんはお店の中に無いなら誰かが盗んだんだと言い、私のお母さんに「この人が盗んだんじゃないんですか」など何も根拠が無いのに言い張り、他の店員も疑い、「中国人なんて信じられない」と言ったのです。その日のお母さんはひどく落ち込み、イライラしているようにも感じました。私はどう声をかければ良いのか分からなくて何も言えず、悔しい思いをしました。結局、おばあさんが来た日では話のらちが明かないと、日を改めてもらいました。ところが数日経ったある日、おばあさんから電話があり「無くしてた物が見つ

かった」「車にあった」と言い謝罪も何もしてきませんでした。流石に電話に出ていた店員が、せめて一言謝らなくて欲しいと頼みましたが謝るところか疑がわれる方が悪いと電話を切りました。私はこの話を聞き、私のお母さんや他の店員は何も悪いことをしていないのに中国人という理由で盗みの犯人だとでっちあげられるのは絶対におかしいと思いました。それに謝罪が一言も無く、疑われる方が悪いというおばあさんの言葉が信じられませんでした。

「中国人なんて」「中国産だから」みなさんも聞いたことがあると思います。中には言ったことのある人、SNSにつぶやいたことがある人もいるかもしれません。言った本人は何気ない気持ちで言ったかもしれませんがその一言に傷つく人もいます。私は中国人の知り合いが多いのですが「中国人なんて」と否定的に思った事は一度もありません。優しくて良い人ばかりです。それなのに「中国人なんて」「中国産だから」という差別や偏見の言葉を言う人はいます。中国人や中国に嫌な思い出がある人もいると思います。しかし差別や偏見による言葉の多くは中国人や中国についてあまり知らない人がSNSなどを通じて自分なりに解釈したことだと私は思います。こうして差別や偏見が連鎖され、「人権」が損なわれていくのです。

産まれた国や親の国籍は変えられません。事実として残り続けます。それによって傷つく人が少しでも減るように私は積極的に中国人は良い人ばかりという自分が経験してきたことをたくさんの人に発信していきたいと思っています。

そして世界中で差別や偏見が無くなり国籍関係なく笑顔に暮らせる世の中に少しでも近づけていきたいです。



優 秀 賞

## 自分らしく生きること

横浜市立名瀬中学校 三年

加<sup>か</sup>藤<sup>とう</sup> さくら

「誰もが自分らしく生きられるようにする。」当たり前の事のようにですが、実際に本当の自分をさらけだして生きている人は多くないと思います。言葉にするのは簡単です。ですが、日々の生活で自分らしく、自信を持つて生きることは難しいと私は感じます。

私は以前、友達に

「そんなにはしゃいでいるなんて珍しいね。らしくないというか……意外。」

と言われたことがあります。私自身は自分の感じた『楽しい』という感情を表現しただけでしたが、友達の目には、普段真面目で落ち着いている私とは違う私が映っていたようです。どちらも本当の私なのに、私は友達からの「意外」「らしくない」という言葉を聞いて、傷つきました。それからは、ありのままの自分の気持ちを出さないように、素直な気持ちを表現することをためらうようになりました。

自分が自分らしく生きているつもりでも、たった一つや二つの言葉で、自分以外の誰かの『自分らしさ』を奪ってしまうことがあります。多くの人が、無意識のうちに友達や仲間の『自分らしさ』を閉じ込めてしまったことがあるのではないのでしょうか。『自分らしさ』を心の奥に自分で閉じ込めたことがある人もいるのでは

ないでしょうか。少なくとも、世界中の人々全員が、ありのままの自分らしく、生きているとは言い切れないと私は思います。

では、自分らしさを守りながら、自分以外の誰かの、自分らしさを奪わないためにはどうすればよいでしょう。自分らしく生きるためにできることは、自分の気持ちに正直になり、周りに流されすぎないようにすることが大切です。また、自分以外の誰かの、自分らしさを奪わないためには、自分がその人の全てを知っている訳ではない、と謙虚に考えることが重要だと私は考えます。例えば、「普段ずっと真面目だからそんな風にはしゃいだりしないと思ってた」という言葉は、人によっては「私ははしゃいだりしない方がいいのかな」という風に捉えてしまうこともあります。自分の何気ない一言が、その人の、自分らしさを奪い、その人自身を変えてしまうこともあるのです。そうなってしまうまいように、私は常に「私はその人の全てを知っている訳ではない」「そんな一面もあるんだ」と考え、相手を認められるようにしていこうと思います。先日、私は友達に誕生日プレゼントをもらったのですが、あまりの嬉しさに飛び跳ねるほど喜びました。その時友達は、

「そんなに喜んでもらえて嬉しいよ。いつもおとなしいところも良いけど、素直に自分の気持ちを表現できるところも素敵だね。」

と言いました。相手への偏見を押しつけるのではなく、新しく知った一面も素敵だと考えられる友達のような人が、少しでも多くなったら、ありのまま生きられる人も多くなると思います。世界中の人々が互いを認め合い、自分の気持ちに蓋をすることなく、自分らしく胸を張って生きられる世界が実現したら、自分も周りも幸せだと思います。





優秀賞

## 命の理由

横浜市立中和田中学校 三年

河<sup>かわ</sup>村<sup>むら</sup>埜<sup>の</sup>愛<sup>あ</sup>

小さい頃から、祖母は私のことをよく可愛がってくれていた。祖父母の家に行くと、いつも祖母が作ってくれたたくさんのお馳走とともにお出迎えしてくれた。食卓には、私たち専用のかわいらしいお茶碗が用意してあった。また遊びに行ったときには、一緒にかかるたやパズルをして、楽しい時間を過ごした。お正月には私たちのために心を込めて栗きんとんや伊達巻き、田作りなどの料理を作ってくれた。祖母のおせちは最高だ。

そんな優しい祖母が、この頃からパーキンソン病という難病を抱えていたことを、後から知った。パーキンソン病とは、体を動かすときに脳から指令を伝える伝達物質であるドーパミンが不足することによって起こる病気である。現在、日本には約二十万人の患者がいるとされ、根本的に治す治療法は見つかっていない。私は生まれて一度も祖母に抱っこされたことがないということを最近になって母から聞いた。病気のせいで手にもまり力が入らなかつたため、私のことを落としてしまうかもしれないと心配し、我慢してたそうだと聞いて、私はとても驚いた。けれど、何より寂しくて、残念な思いでいっぱいになった。それと同時に、今になって知ったというのことに對し、複雑な思いが募るばかりだった。

私が小学五年生の頃、祖母は荷物を移動させた際に、腰の骨を骨折し、大手術が行われた。手術は成功した

が、みるみる状態が悪化していった。ある時、病状が危ないと病院から緊急の呼び出しがあった。祖母の病室は静まりかえっていて、脈拍を測る機械だけが音をたてていた。目の前には必死に病氣と戦う祖母の姿。私は言葉を失った。胸が強く締めつけられて、苦しかった。その場から逃げ出したくなった。目を疑う現実に理解が追いつかなかった。今でもあの光景は、はっきりと覚えている。

祖母はリハビリを続け、退院をし、一命は取りとめた。私は奇跡だと思った。正直、あの時私はもう無理だと思っていた。しかし、祖母は強かった。諦めなかった。祖母の心の強さを感じた。それでも祖母の病氣はよくなる兆しはなかった。

あれから五年が経った。病状は徐々に進行していき、口から食事をとることができなくなり、胃ろうの手術をした。それでも弱音一つ吐かず、私たちが遊びに行くと、「頑張つてね」と励ましてくれる。

最近ニュースで悲しい事件を耳にする。その度に私は悔しくなる。祖母のようにこんなにも全力で毎日病氣と戦い、葛藤している人が何人もいるのに、あまりにも命を粗末にすぎだと思う。命の大切さについて考えるのは難しい。なかなか答えはでないし、それについてそもそも考えない人だつて少なくない。私も実際にこのような経験がなければ、ただただあたり前と思う毎日の繰り返しだつたと思う。命の大切さは思っているよりも、身近にあり、それに気づいていない。そんな世の中だけど、一日一日、生きる希望というものを求めて手をのばしている人がいる。その事実を一人でも多くの人に分かってほしいと思う。



優 秀 賞

## 私の母は障がい者

横浜市立老松中学校 二年

岸 きし  
珠 たま  
来 き

「お母さん、障がい者だったよ。」

ある日、母が私に言った言葉だ。

「え…?」

私は言葉を失った。混乱して頭がぐるぐるした。どうやら母は網膜色素変性症という障がいがあるということが発覚したらしい。急いで自分のスマホで調べると、こんなことが書いてあった。

「特徴的な症状は、夜盲、視野狭窄、視力低下などがあり、生活に支障がでる場合がある。」信じられない言葉ばかりが目にとびこんできた。私には遠いものだと思っていた障がいというものが、急に身近なものになった気がしてとても怖くなった。

それから数か月がたって、段々と症状が顕著になった。道で転んでしまったり、母のすぐ近くにある鍵をなかなか見つけられなかつたりすることが多くなっていた。母はとても辛そうだった。

そして母は白杖という杖を使うことになった。白杖とは、「道路の通行に著しい支障がある障がい者が、歩行の際に前方の路面を触擦する等に使用する白い杖」というものらしい。正直、母が初めて白杖を持ってでか

ける日、私は母が、障がいのことをあまりよく思っていない人や、以前の私のように、白杖の存在を知らない人からまれてしまうんじゃないかと、少し心配だった。けれど、帰ってきて話を聞いてみると、

「まちなかでいろんな人が『大丈夫ですか？』『お手伝いしましょうか。』って、声をかけてくれたよ。」

と、にこにこしながら話してくれた。私は安心したと同時に、すごく嬉しかった。でも、私が母が白杖を持つてでかけることに対してマイナスになることを想像してしまったのは自分も心のどこかで障がいを悪いものとしてみているからなのかもしれないと、また心配になってしまった。

そこで私は、障がいのことについて、もつと調べてみることにした。いちばん気になったのは、障がいの者の方との接し方だった。「障がいの者の方に席をゆずろうとしたら、『障がいの者扱いするな！』とどなられてしまった。」みたいな話をよく聞くから、いつもどう接していいか分からなくなってしまうからだ。早速調べてみると、記事にはこんな内容が書いてあった。

「『障がいの者』をひとくくりにすること自体が間違っていると思う。人と人との接し方に健常者も障がいの者も関係ない。一度はつきり『何か、お手伝いしましょうか？』と個人に聞いてみて、その人に合った接し方をする。」私ははっとした。思い返してみると、「この障がいを持っている人たちには、この対応をすれば大丈夫。」と思っていたことがあったかもしれない。健常者である私たちも、誰かに何かをされて、ゆるせることと、嫌な気持ちになることはそれぞれで違うはず。こんなに大事なことに気付くことができなかつた自分がとても恥ずかしく思えてきた。そして、今度からは困っている方を見つけたら、積極的に声をかけたいと思う。

実際、以前の私のように、まわりに障がいをもっている人がおらず、障がいというものは自分にはあまり関係がないと思っている人は少なくないはずだ。でも、一度障がいというものについて考えてみてほしいと思

う。さらに、「障がいとはこういうものだから」とすぐに決めつけずに、健常者も障がい者も関係なく接することができたらいいと思う。



優 秀 賞

## 理解するということ

横浜市立日吉台中学校 二年

栗くり屋や 薫かある

小さい頃から「障害者」という言葉が嫌いだった。私の母は聴覚障害者で、大好きな母が差別される対象に入っているのが心苦しかった。この言葉が存在しなければ差別で苦しんでいる人が生きやすい社会が作れたのではないかと思ったりもした。しかし、私は思ってしまった。「障害者って凄いな」と。

小学生の時、母と自転車に乗りながら家に向かっていた。私が小さかった事もあり、曲がり角で止まらず、そのまま進もうとした。その時、信号やカーブミラーもない場所なのに母が「危ない！」と叫んだ。私は右から聞こえてきたエンジン音で車がいたのに気がついた。しかし、耳の聞こえない母がどうして車の存在に気づいていたのかわからなかったため、母に直接聞いてみると「街灯とは違う光が見えた気がしたんだ。」と言った。私は衝撃を受けた。母が声を上げた時は夕方でも道も明るく、街灯の灯も車のライトも私には全く見えなかったからだ。その時私は、母は耳が聞こえない分、周りをよく見ているんだと気づいた。思い返すと母は、私が手話ができないため、口パクで言いたいことを伝え会話をしてくれたり、私の顔や行動を見て「何かあった？」と、聞いてくる事がある。母は私の口元や行動をよく見ていたのだ。

それでも友達には耳が聞こえない母ではなく、手話で自己紹介ができるだけの私を褒める。私はそれが心底悔

しい。また、パラリンピックに聴覚障害者の競技が存在しない事も悔しいと思っっている。存在しない理由は、第二次世界大戦後にパラリンピックが始まった事が関係している。通訳などを雇い、かかる費用を少しでも減らすために聴覚障害者は脱退という形になったようだ。私は、その歴史が今も残っている事に違和感がある。今は当時よりも費用が安くなっているのではないか、そう思った。母が学校行事に手話通訳を依頼する時は無料だと言っていたからだ。しかしそれは、健聴者である私の意見だ。難聴者である母の意見は意外なようで納得させられるものだった。「お母さんは参加できないままでもいいと思うな。耳が聞こえないだけで水泳とか陸上のスタートだって一気に差をつけられるだろうから、見ていて悲しくなるかもしれない。」と、言われた。何を言えばいいかわからず、固まる私に母は続けた。「デフリンピックって知ってる？難聴者だけが出られる世界大会なんだ。」と。私は正直に聞いた事がないことを伝え、詳しく教えてもらおう事にした。デフリンピックとは、IOCが開催する「オリンピック」と「ろう者」という意味をもつ「Deaf」を合わせて作った造語であり、四年に一度開催する。世界規模で行われる大会を、どうして私は聞いた事がないのかも聞いてみた。デフリンピックはICSDとCISISという国際ろう者スポーツ委員会が主催であり、IOCからは支援を受けているだけであり、健聴者には興味が出にくいいため、視聴率が上がりにくく、テレビでは放送しないのではないかと、母は言った。悔しい事だが、これにも納得させられた。去年の友達との会話の内容が大きな原因だった。オリンピックの開会式が近づくと、話す内容はオリンピックばかりなのに比べ、パラリンピックの開会式が近づいても、誰一人その話を持ち出そうとする人はいなかった。この事を思い出し、難聴者の母をもつ私でも知らなかったデフリンピックに友達が興味をもってくれるとは思えなかった。沢山の人に難聴者を知ってもらえる機会が私達の知らないところで減ってしまい悔しかった。しかし、誰も何も悪くないし、私に

もどうする事もできないと思った。でも、よく考えたら私はそんな事を言えるような立場ではないのだ。

「手話を覚ええないの?」

最近、私が姉に聞かれる言葉だ。「母が難聴者なのに手話ができないの?」と、不思議に思う人が大半だろう。手話ができないなら母と喋れないのではないかとみんなが思うはず。その通りだ。十四年も生きてきて手話なしで母と会話ができたのが不思議なくらいだ。先程も言った通り、私は口パクや文字に表す事で母と話してきた。相当迷惑をかけただろう。それでも私は母に「手話を覚えてほしい」と、言われた事がない。私に氣を使っているのだろう。その優しさに甘えてきた自分が恥ずかしくなった。そんな時、脳卒中になった先生と出会った。その先生は自分の動かせなくなった半身を見捨てる事なく、前を向き砲丸投げの選手になったようだ。私はそれを聞いて、母の難聴を受けとめてこなかった事を自覚し、手話を覚えると決めたのだ。

母の「手話を覚えてほしい」という願いは、健聴者の私が耳を塞いでいたせいで届かなかった声。しかし、今の私は母の心の声に耳を傾けた。それが私にとって難聴者を理解するという言葉に繋がることを願っている。





優 秀 賞

## 私は私らしく

横浜市立緑園義務教育学校 九年

近 藤 菜 月  
こん とう な つき

いつからだろうか。「女の子はやっぱり、しつかりしてるね。」や、「男の子だから元気だね。」のように、性別などで括って話をされたり、しているような気がする。小学生のときにそんな誉め方をされた。誉められるのは嬉しい。けれど、私はどこかすつきりとしらない、モヤモヤした感情を覚えた。

思い返すと、社会にはまだ「女性像」「男性像」といった深く根づいているイメージがあり、このときはそのようなイメージを自分に押しつけられたと感じたのかもしれない。もしかしたら私たちは、そのようなイメージに無意識のうちに囚われ、誰かを縛っているのではないだろうか。

私はカッコイイものが好きだ。服装もカワイイものよりカッコイイものにひかれることが多い。服装は自分を表現するための大きな要素の一つだろう。私の自分の服装についての考え方は、成長と共に変化していった。

小学生の頃から、特にスカートが嫌だと思ふようになった。私にとってスカートは女の子っぽいものの代表格。それを着たら私は「私」ではなく「女の子」として見られてしまうと、そう感じていたのかもしれない。自分のことを、文章中以外で「私」と呼ぶのが嫌だった。胸がザワザワした。強い違和感があった。「僕」

「俺」、名前でも呼んでみたけれど、周囲の反応も気になったし、何かが違う気がして続かなかった。そのまま自分を完璧に表現してくれるような画期的な何かを私は求めていた。男になりたい訳ではない。ただ、「女の子だから当たり前」みたいな雰囲気があったのだと思う。私は自分とは大きく異なる「女の子」のイメージを、無意識のうちに拒んでいたのかもしれない。同時に、そのイメージに当てはまることができなことが不安でもあり、自分に自信はなかなか持てずにいた。

私は中学生になった。制服はスカートだが、嫌だとは思わなかった。これでも良いと、そう思えるようになった。さらに、自分のことを、「私」と違和感なく呼べるように少しずつなっていた。これは、そのままの自分を受け入れてもらえたと感じたからなのかもしれない。きっかけの一つは、自分の好きな服を着て、同じ部活の友達と遊んだときに「服カッコイイね。」と言われたことだと思う。その人に否定されるとは考えていなかったけれど、それでもどこか不安はあった。だから、いつも通りに接してくれたこと、そのままの「私」を誉めてくれたことが嬉しかった。段々と自信がつき、心によゆうができるようになった。自分が一番、自分をイメージで縛っていることに気がついた。言葉や服装などは、自己表現の単なる道具にすぎない。その道具は万能ではなく、使い方一つで私の全てを表現してはくれないし、それで私が私でなくなることもない。そう考えるようになった。最近ではかわいいものにも興味湧いてきて、明るい色の服を着たり、ネックレスを集め始めたりと、好きな物が増えていくことが楽しいと感じる。他にも、笑う回数、大切だと思う人や、時間、場所が増えたり、たくさんの変化があった。

色々な人と関わるなかで、個性は十人十色だと気がついた。自分の個性を見つける事が楽しいと思えた。私は私らしくいて良いんだと自信をもてた。

私は私だ。私はずっと私の個性を見て欲しかった。誰かにつくられた模範解答と私を比べないで欲しかった。

私たち自身が、私たちがつくったイメージに囚われている。時に的外れで、窮屈で、誰かを傷つけることもあるそれは、私たちが自分らしく自分らしさを表現して生きるには不要なのだと思う。

これから先も、私たちは自分を表現することを要求され続けるだろう。そこで一人一人異なる個性を自由に表現できたなら、それまでの自分には無かった新しい世界まで見られるかもしれない。もちろん、対立することもあるだろう。でも、それもいつか良い経験になったと言える日が来るのだと思う。私たちは互いに影響し合いながら様々な経験をすることで、何度でも変化し、何度でも成長することができるのではないだろうか。

そのためにはまず、自分を表現していくことが大切だと思う。それと同時に、自身でつくってしまっているイメージに囚われず、相手、自分を見ることを心がける必要があるだろう。



優秀賞

## 「体験」と「記憶」、つなぐのは私たち

横浜市立青葉台中学校 一年

佐々木 倫子

みなさんは、今、幸せですか。笑顔で日常をおくれていますか。私達が何気ない日々をおくっているこの世界は全員が胸をはって、

「私は今、幸せです。」と言えるでしょうか。

私には、昨年の四月に亡くなった祖父がいます。

祖父は十四才の時、東京大空襲を体験しました。私が小さい頃、姉が祖父に戦争体験について聞いていました。その時は、私はまだ幼くきちんと理解できていませんでした。しかし、小学六年生の時、祖父の話について改めて考え直すきっかけがありました。戦争について考える授業で、先生に戦争を体験した家族がいればその話を聞いてきてほしい、と言われました。その時、私は祖父の話が思い浮かびました。

「ある空襲の時」祖父は友人と建物の影になる部分へ逃げこみました。すると、友人が目の前で血を流して倒れました。爆撃によってとびちった破片に、友人は巻きこまれたのです。この時、祖父は目の前で友人を亡くしました。そして、祖父が空を見上げると飛行機に乗っていた兵隊と目が合ったそうです。目が合うくらい飛行機は低空飛行で攻撃をしていたのです。

祖父が体験した話は、今まで聞いたどんな話より、恐くて残酷でした。

私は、その現場を見ていません。しかし、いつも優しくおだやかだった祖父から聞いた生々しく残酷な戦争の話は、忘れることができません。今、私は祖父がその体験をした頃と近い年齢になりました。もし、その場にいたのが私だったら…。大切な家族や大好きな友人が目の前でいなくなったら…と想像するとそんなこと現実として受け入れられません。とてつもなく恐くて、どうしようもなく悲しい気持ちになります。

小さい頃に聞いた話をなぜ、こんなにも覚えているのか自分でも不思議に思います。きっと優しかった祖父から「血が…」や「死んだ…。」という言葉がでてきたことが驚きで印象に残ったのだと思います。

今、ロシアとウクライナが戦争状態にあります。私は祖父の話を重ねながらニュースを見ています。ウクライナの現状を思うと切なくてたまりません。「なぜ戦争が起こるのか。」と憤りを感じます。「戦争をする意味は何か。」と疑問を感じずにはいられません。父に聞くと「本当だよな。資源や土地を増やしたい、食料がほしい、とか聞くけどね…。でも、こんな戦争だめだ。絶対に…。」とニュースを見ながらいつもつぶやきます。私も本当にそう思います。祖父や祖父の友人のような人が増えるのは、絶対にあってはいけません。連日のニュースや父のつぶやきを聞きながら、日毎にある思いが強くなっています。「人が人を傷つけて得るものは、誰かの人生・命より価値あるものなのか。」きっと誰かの人生・命より価値あるものなんてないはずです。しかし、私に今できることなんてあるでしょうか。テレビの先で戦争に苦しんでいる人を全員救える力が私達にあるのでしょうか。ここで戦争解決なんて自分には関係ない、と勝手に思ってしまう人が多くいると思います。私もその一人でした。「どうせ自分にできることなんてない。」そう思っていました。しかし、今は違います。私にだってできることがあると思うようになりました。それは、戦争の記憶を忘れない、ということだ

す。きっと祖父も自分のような思いをする人もう二度と出したくないと考え、私たちに話してくれたのだと思います。祖父はもういません。祖父のように実際の体験として、戦争を伝えられる人もどんどん減っています。しかし戦争のことを知り悲惨な戦争の「記憶」を忘れずに、次に伝えていくことは私達にもできます。それが世界中の人の役割だと思っています。もう二度とくり返さないといい、伝え続けなければ争いではなく対話や協力という、方法を選ぶと思います。過去の戦争や今、遠くで起きている戦争を実際に体験することはできません。しかし、当時の話や、今流れるニュースを見聞きして思いをはせることで戦争の恐怖や悲しみを自分のこととして感じ、戦争はあつてはならないと、強く感じることはできます。それは何人かがやればいいということではありません。誰一人、欠けてはならないのです。一人一人が想いを一つに手と手を取り合う。そして、最後の人まで想いが届き、手を取り合ったその瞬間、きっと全員が「私は今、幸せです。」と笑顔で胸をはって言えると思います。

私もみなさんも手を取り合う世界中の人々の中の一人です。



優 秀 賞

## 「温かい数分間」

横浜市立共進中学校 三年

澤 さわ 井 い 優 ゆう 希 き

「知らない人に声をかけることができる」という人は何人いるのだろうか。質問を変え、「知らない人を助けることができる」という人は何人いるのだろうか。こう質問したのには理由がある。

その時私は横浜にいた。私の隣には母もいて、買い物が終わった帰りだった。横浜の西口は休日ということもあり人で賑わい、買い物帰りの人、遊びに行く人が沢山いた。当然、人だけでなく車を多く、トラックから自動車まで沢山の車が行き来していた。その時だった。狭い道に向かいからはトラックが来ていた。視線を移すと、杖を持ち、道をコツコツと叩きながら歩く男性がいた。男性はトラックに気づかず、トラックも死角で気づいていない。「あの人危ないね」と母に声をかけると母は横には立っていないかった。その時には走り出し、その人を安全なところへ誘導した。その後、駅まで一緒に向かい男性はお礼を言ったあと、電車に乗って帰っていった。

「どうして助けたの。」と質問すると「理由なんてないよ。」とただ一言母は答えた。その時自分の心の冷たさに気がついた。母よりも先に気づいていた自分が言った言葉は「危ないね。」その一言だった。母にこんな質問をした自分にもその時の自分自身にも腹が立った。私はなんて馬鹿なんだろう。そう思った。母がその後

に教えてくれた。「あの人は目が見えなかったよね。そういう人たちが困っていたらすぐに声をかけて助けてあげられる人じゃないとダメだよ。」五年前の話だが今でも鮮明に覚えている。男性が母に何度もお礼を言っているときに私は横にいてとても嬉しかった。電車が来るまでの時間だったがなんだかものすごく心が温かい数分間だった。これが人を助けるということなのだろうと中学生になった今なら分かる。

中学生になって道徳の授業を受けて「障がいのある人」について詳しく知った。目が見えないことを盲目といい、障がいというのは目だけではないということも知った。また、今の日本は障がいのある方がとても過ごしやすいとは言えないということも習った。

私ができることってなんだろう。

「誰にとつても過ごしやすい環境を目指すなら、自分が行動すればいい。理由なんてないんだ。誰かのために誰かが動く。これが助け合いだろう。」私の中での答えが明確になった。実はあの後、横浜での出来事と似たようなことがあった。今度はもうあの時のように突っ立っている私ではない。「大丈夫ですか。」その一言が言えたのだ。その他にも友達と学校帰りに人助けをしたこともあった。歩くのが困難なご老人が手には重い荷物を持ち一歩歩くたびに立ち止まっていた。「あの。」そう声をかけ、友達はご老人を支え、私は荷物をもち家まで送った。「ありがとう。」この五文字にはあの時の温かい数分間と同じ気持ちにさせる力があつた。

今、本当は声をかけたくても勇気が出ない人がいるだろう。けれど必ずその優しさは自分に返ってくる。

助ける人も助けられる人も年齢なんて関係ない。性別も体力も。助けることに理由なんて必要ないのだ。困っている人に声をかける、手を差しのべる。ただそれだけでいい。障がいがあってもなくても誰もが過ごしやすい世の中にするための一歩目に必要なのはこの勇気と優しさだけなのだ。





優秀賞

## 暗闇に潜む心の声を

横浜市立南高等学校附属中学校 一年

関 せき 美 み 月 つき

彼女はこう言った「私には生きている意味があるんだろうか……」と。私はそれを聞き、とても言葉では言い表せないような感情になった。胸が締めつけられるような思いで、私は彼女の話を聞いていた。

四年生の時、私はとても貴重な経験をした。私の通っていた小学校に、シンガーソングライターが来る。そして、音楽を奏でてくれる。私はその日、とてもわくわくしていた。だがその日、思っていたのとは違うわくわくが待っていた。

彼女の名前は大和田広美。シンガーソングライターだ。彼女は目が見えない。一歳九ヶ月の時に麻疹で失明したのだ。私はその時、衝撃的な事実とともに、たくさん思うことがあった。目が見えない人がピアノを弾けるのか。鍵盤の場所が分かるのか。どうしてわざわざシンガーソングライターになったのか。なぜそこまでして続けるのか……。けれどその感情は、彼女の美しい歌声とピアノの音色とともに消えていった。澄みきっていて美しく、まるで森のように、ささやかで居心地のよいメロデーは、彼女の思いがたくさんつまっていた。私は自然と涙がでてしまった。

私も、彼女と同じようにピアノを弾いている。だから、ピアノの楽しさも分かるし、難しさも分かる。ピア

ノは、いつもとは違う世界に入るような、自分の世界に入って自由に弾けるような、そんな良さがある。その反面、指を素早く動かし、足も動かし、自分の頭で次はどの音か、どんなふうに弾くか、考えなければならぬ。

このようなことが、目の見えない彼女にできるわけがない、ずっとそう思っていた。でも、彼女は弾いていた。ピアノストのように弾いていた。その時は気づいた。彼女は私たちと何も違わない。同じ空の下を歩いている私たちと同じ人間で、何かを言う権利もあれば、なにかをする権利だってある。もちろん、音楽を奏でる権利も。

この時私は、小さいころに読んでもらった、「みえるとかみえないとか」という絵本を思い出した。宇宙飛行士である「ぼく」が出会った宇宙人に驚いたのを、強く覚えていた。前にも後ろにも目がある宇宙人もとても足の長い宇宙人も、空を飛べる宇宙人もいて、全員の宇宙人もいた。見えない人だからできることも、できないこともあるのだと気づいた。住むところが違えば、当たり前だったことがかわいそうと思われ、驚かれ、同情され、気を遣われる。このことに私はとても痛めつけられた。お互いが、「自分には生きている意味があるんだ」と心から思い、お互いが心地よい空間をつくり上げるには、お互いの違うところを理解し、寄り添い、思いを伝え合うことが大事なのではないか。そうやって、人は幸せを感じていくのではないか。

私は、今までの自分が間違っていることに気づかされた。目が見えないことをかわいそうと思い、目が見えない人は特別だと認識していた。差別はよくないと思っていながらも、自分の考えていることが差別につながっているのだと知ると、自分は今まで何と何とすることをしていたのだらうと激しい後悔に襲われた。

よく考えてみれば、人はまったく同じなんてことはない。性格が違えば、顔も違い、考えも違う。悩みだっ

て人それぞれで、足がなかったり、目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりするのだ。私たちはそこだけを大きく考えて自分と比較し、自分とは違う、と離れていく。目が見えない人は見えない、たったそれだけのことなのに。

シンガーソングライターの大和田広美さん。まさに、彼女の歌の歌詞に込められた思いがそれだった。彼女が奏でてくれた、「愛のちから」という歌には、私たちはみんな違うけれど、みんなが寄り添い、支え合い、助け合って生きていけば、生きることが楽しくなる。前に向かって進める、というものがあつた。特に印象に残つたのは、「愛の力は世界を救える、心を一つに」という歌詞だった。このとおり、「愛」は、全ての人が人格や個性を尊重しながら生きる「共生社会」に必要なものかもしれない。「愛」を大切にすれば、目が見えづら  
い人、歩けない人にもそつと手をさしのべ、そして手をとることができる。そんな社会を目指していくべきではないだろうか。私もそんな人になりたいと心から思った。

障害のある人も、ない人も、すべての人が、個性を自信とし、互いに尊重できる「愛」のあふれる世界へと変わってほしい。ピアノの鍵盤一つ一つが重なり、補い合い、調和していくように。そして彼女の心の声が届くように。





〔港北  
区〕

小城田中学校

新城田中学校

日吉台中学校

大綱中学校

篠原中学校

樽町中学校

日吉台西中学校

新羽中学校

高田中学校

田奈中学校

中山中学校

十日市場中学校

鳴居中学校

霧が丘義務教育学校

東鳴居中学校

山内中学校

谷本中学校

青葉台中学校

みたけ台中学校

美しが丘中学校

すすき野中学校

奈良良中学校

〔緑  
区〕

〔栄  
区〕

本郷中学校

上郷中学校

桂台中学校

西本郷中学校

飯島中学校

岡津中学校

中和田中学校

上飯田中学校

いずみ野中学校

領家中学校

緑園義務教育学校

瀬原中学校

南瀬谷中学校

東瀬谷中学校

下瀬谷中学校

〔都筑  
区〕

緑が丘中学校

もえぎ野中学校

あざみ野中学校

鴨志田中学校

市ヶ尾中学校

あかね台中学校

都田中学校

川和中学校

茅ヶ崎中学校

荏田南中学校

中川西中学校

東山田中学校

早瀬中学校

大山正中学校

戸塚中学校

舞岡中学校

境木中学校

豊田中学校

汲沢中学校

名瀬中学校

深谷中学校

秋葉中学校

〔戸塚  
区〕

■その他

聖ヨゼフ学園中学校

関東学院六浦中学校

横浜中華学院

ご協力ありがとうございました。

● 応募状況 .....

推 移

年 度	平 成					令 和		
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度	3年度	4年度
応募校数	143	144	140	139	139	137	127	131
作 品 数	58,487	60,721	60,209	59,193	56,040	55,914	55,079	53,434

## ●第41回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

### 〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会 24名

### 〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事 10名

### 〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会長	小林	千恵子
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	長島	由佳
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	高橋	潤
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	浅井	ゆき子
児童文学作家	吉富	多美
横浜市PTA連絡協議会会長	竹原	浩太郎
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	佐藤	典之
横浜市人権教育研究会会長	犬塚	真人
教育委員会事務局人権健康教育部長	近藤	浩人
市民局人権担当理事	森	智明

### ●協賛

横浜DeNA ベイスターズ

横浜F・マリノス

横浜FC・ニッパツ横浜FCシーガルズ

横浜ビー・コルセアーズ

横浜キャノンイーグルス

### 横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・

横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

## 第41回全国中学生人権作文コンテスト 横浜市大会作文集

令和4年11月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

TEL 045(671)2718(横浜市市民局人権課)

横浜市教育委員会事務局

人権教育・児童生徒課 TEL 045(671)3296



